メモ＆ネタ的な？普段の発散用

鼎都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メモ＆ネタ的な？普段の発散用

【Ｎコード】
Ｎ００７０Ｖ

【作者名】
鼎都

【あらすじ】
ＢＬに関してのネタやら、メモ的な何かを発散程度に書いてみる
↑

とりまの説明

はい。
タイトルどおりにございます…

普段、新作を書きたくて書きたくでしようがないこの身にたまる、ストレス的な何かを発散するために、戯れ言のようにだらだらと書くためだけに存在するメモ兼ネタ帳的な役割をする特に意味のない無駄な作品という名のメモ帳。

まぁネタとしてはＢＬ

うん。

当たり前のようにね。

つか、常に脳内変換されるのはＢＬだよ。

うん。

ＮＬでも

総てがＢＬに…ぐへへへ↑

ということで、色々変態要素満載になるかと思われるものですが…

まぁ適当に流し見してやってください↑

あとは感想とかくれるとありがたき幸せにごぜぇます…

このネタいいな～

とかあったら大歓迎…

何かが終わり次第では書こうかなとか思ったりする。

はい。

それでは、特に、本当に、ガチで意味のないページですが…

皆様の長けた妄想力に任せて

色々

戯れ言

独り言

言っていきたいと思います。

ときたま

鼎都の

生活での、見たいろいろな男の子の行動を

語るかもしれない。

うん。

萌だね。

じゃあ、次ページより始まります。

ってか、何か最近

鼎都…皆様に対してタメ口になってる気がするのは気のせい…でしょうか？

基本、敬語なんざ使いたくもねぇよ！（敬語キャラは萌っす★）な奴なんで、タメになることが結構あるかもしれませんが…

許してやってください…

できるだけのことは尽くしますんで…はい。

それでは、まぁ適当に読んでいただけたらなと思います！

多分…

ないかと思われ…

もし、

このネタ使いたいかも…

とか

思われたかた…
神様ですね★はい！

こちらとしては、ここ、小説家になろう様なら書いてもらいたいな～と思うので…
鼎都に承諾の上、お願いします♪
ぜひ…読ませてくださいね？
ちなみに強制★とかいってみるんだＺＥ★↑

まぁ放置でお願いします…

それでは、よろしゅうねがいます♪

第一回（前書き）

バカなことをやっちまった★

前に、携帯にやりたいネタを片っ端から書いていたのだが…

この前…

全消去★

あー！！！

第一回

うむ

7月18日

本日は曇り…

友人…（危うくアニオタから腐へと進化しそうな…）と、漫画を漁りに行き…腐コーナーで熱血的に（一方的に）語り…純粋少女を引き込むところであった…

その後…1を見ていないのに…

友人の付き合いで…

ハリポタ…2のほう…見てしまった…うあぁあああああ！！！！！！

かわゆいね！

ハリポタかわゆいね！

あかんね！

小さいころっつか、最初の方、かわゆすぎゆよね！

3時くらいからとりま3時間カラオケぶっ飛べ★

うぬぬぬ

音痴で悪かったのー！！！！

まぁええわ

ってか…ちょ…この野郎ども！！！！！！！！！！

ど・れ・だ・け・も・え・な・ん・っ・す・か！！！！

「なぁ、それちょ」

「ん？あーこれ？うい（手に取って相手の口に突っ込む）」

「やっぱ！うま！（突っ込んでくれた方の指をなぜか舐める）」

「ちょ、くすぐったいっつうの（頬赤める）」

…

これはあれですか？

甘エロいちゃこら青少年フラグっすか？

ちょ…動画とっちゃいたいんで・す・け・ど！いいですか？

はうあ！

萌いただきっすよ！

ってか、なぜ！？

なぜ舐めた！？

そして「美味い」はどっちが！？

菓子！？指！？

どっち！？

（危うく答えを求めそうになった…）

ちなみに

菓子は…

うん。

チョコだよ

チョコプレイだよ

ぐひゃ↑

ちなみに、これは…

あれっすよ。

映画見てるときの

となりの

男子二人。

多分高校生かな？

うん。

いい、萌をいただきまして…

ごっちゃんです！！！

軽く、

ハリポタよりも

こっちに集中（耳と全力で正面向いたまま視線は横で）していた…

ちなみにどっちも…

受けください！

ってか、

最近の子って…全員受けくさくねっすか？

見てて思うんすけど…

１８０近くても…

ラインが細い！

１８０越えてても…

何か細い！

みんな受けだよ…

そして、

一人の強靭な攻めが世界を統一…

ぐへへへへへへへへ！！！

その攻め＝鼎都がやりたいな～♪とか思ってたりね？変態は総てを統べるのさ★

（とち狂い注意報発令～狂った変態さんに注意してくださいまし）

第一回（後書き）

いや～

遊んだ★

明日はもっと遊ぶぞ～！

別の意味で★

それではさらば★

第二回（前書き）

何となく連日で…頑張ってみた★

第二回

袴は一生の萌だね★

弓道着は綺麗すぎゅ…

はうあ…

萌（はぁと

ってか、男の子っていいね★

おにゃのこの目気にせずに服脱いじゃうし、そこらへんでパンツ一丁祭りだからね！

特にこの季節…

皆暑いって、脱いじゃうw

そして、鼎都はそこに混じって一人悶々と妄想しているという変態さんでした★

正直…うーん

何か…あれだね。

一部の子達は、「猿？」って思っちゃうけど…ある境を超えると…

「萌（はぁと」になる。

うん。

年の境でもなく…

顔的な何かでもなく…

わかんないけど、萌！ってときと猿！って時がある？

つまりは、鼎都の目は自動的に萌対象と対象外と分けており…二次元フィルターを勝手に降ろしていちゃこらさせてくれるんだよ！

す・ご・く・ね？（バカの戯れ言です。無視してやってください笑）

ってかねてかね、

男子同士ってかわゆいね！うん。もちろんってか当たり前だけどね…

普通に抱きつけるってのがいいよね！
おにゃのこもええが…正面で胸同士あたりぷにゅってなってるの可愛いけど…
男子は背に覆い被さるように抱きつくからいいね！
そのまま…バカのノリで、腰振ったりね！
うん。
下ネタ多いよ★
そして、鼎都もそこに入るという…傍観していてもいいのだが…
いや、むしろ傍観で一人ニヤニヤ？
いやいや…変人…元より変人じゃ…今更何と……
ちなみにおにゃのこに関しては、巨乳も美乳も貧乳もみーんな好きだよ！
だって、かわいいから★
男の娘はいたら一生の悔いなし…とまではいかないけど、萌を探求するために…うん。
お近づきになりたいね！

本日は…本日も…

ってか台風？

渡り廊下、壁ないからさ…

おにゃのこの

うん

スカートピラリどころか

バッ！！！！

フルオープーン★

祭りだったよ！

かわゆいの～w

必死で抑えている姿もなかなかのもので…（ジュルリ

は！いや、

決して、スカート抑えるの手伝おうとかいって

あ！みたいな展開をしようとしたわけじゃないからね！？

そこご理解！？

うぬぬぬ

んで

何だっけ？

そうそう。

台風ですね～

皆様…

吹き飛ばされないように

お気をつけくださいまし★

それでは

ほなさいなら～ノシ

ちなみに、

中途半端なのは…あと数分で日付が変わるからだよ！

また明日かけるようにね！

第三回（前書き）

うぬうぬ

…

れぇぽぉおおおおとぉおおおおお！！！

第三回

一つ
夢を
幻想を
見ていた
かもしれない
もし
二次元世界

というものが

存在していたならば

パラレルワールドのように

俺は

……

……

はっきり言おう。

こんなこと言っておきながら

バカを考えた。

俺は　特にしたいこ

とが見つからない。

お前なら

何がしたい？

「え？もちろん…弄≪あそ≫ぶに決まって

るでしょ？」

あは★

何となく書いてみたw

パラレルワールドネタ★

ちょっち夢を見ながら、特に何もしたいことを考えたことがない、
または無いに等しく思い、現実と日常に忠実に生きる一応青少年の
はず、心は中年のおっさん的な少年の話w

うぬぬぬ

一つ思った。

僕の年は何才？★

はい。問題です。

鼎都の年は何歳で

しょー！？

１００歳とか人間的にありえない年言った人！

大正解としておきます★

え、何で？

そりゃあ、鼎都が人外生物ととれる人間という形をした地球外生命体（それをバカと読む）だからだよ！！！

ふふふふふふふふふはははっはははははははっはははあああああ
ははははははははは！！！

これ（鼎都の作品という名の戯れ言とかその他もろもろ執筆物）を

相手も、鼎都自身も知らず…

知ってる人が見ていたら…

軽く恐怖物だよね！

特に…うん。

まぁいいや。

鼎都の知り合いには…鼎都という存在を知ってる人はいないはずだし…

鼎都と同じ趣旨思考を持ちながら、こうやって小説を書いて、読んでる人はいないはず…

ってか、鼎都の知り合いにＰＣをよく使う人間がいない？

いたとしても…思考回路が逆転回りというか…うん。

ないね。

ということで、

ちょっち二次元世界に現実を混ぜ込んでみた★を終了。

はーだーかーまつりじゃーーーーーーーーー★

第三回（後書き）

本日暴走妄想全力疾走…はできなかった！！

第四回（前書き）

四回目。

やっと…ネタのメモ帳らしき…モノ？

第四回

ある意味、鼎都の書いている〈別サイトにて…〉話のまんまかもしれない…

幻想

理想

夢想

「死を」

「生を」

俺には死のみ。
生を知らない。

それでは、何故俺は「生」きている？

否。

源。人の言う心が死んでる。つまり死。

「死神」

俺は、死んでも尚、生し、日を経る。

暗殺。企み。排除。誘導。

「お前に与えられたモノは“死”。生きていたとしても、それは屍。
生霊。分かったか？」

使命。
死命。

心は無。

生は死。

我は亡。

それが、俺。存在は「死神」。

人というものは残酷だ。

生というものも残酷だ。

流れ、流れ着き…人は、何をし、何を思い、何を辿るのか？

謎。

謎。

「お前は、死を考えたことがあるか？」

一筋の淡い淡い光。

短く儚い命を持ち、必死に花咲かす一輪の花。

「俺が死」

「お前は死んでないだろ？」

答え。

困惑。

『そう。

お前は…』

言うな…

『生を』

言うな…

『与えられる前から』

言うな…言うな言うな！！

『知っている』

言うなぁぁあああああああああああああああああああああ！！！

<僕は…何？>

『君は生』

＜違う…僕は…そんな綺麗なものじゃない＞

人を殺めた。

人を騙した。

人を消した。

人を…

人を…

「そんなこと言うんなら、お前はまだ生きてる。心が死んでる。それは無だ。何も思わず、何も考えず、機械人形のようにただ規則的な動きをするだけ。お前はまだ生きている。お前は死んでいない」

「あぁぁぁぁぁぁあああああああ

「…死神か？ご苦労であった。休むといい。ああ、お前には休息など要らぬのであったな。次の仕事を与えてやろう」

「休息が必要なのは貴方様。ゆっくり…永遠に休むといい」

「何を…っはぐあぁあああああ！！！！！！！！」

貫く…二本の刀。

黒陽と白陰。

最後に貫く体は、あまりにも醜い異物≪モノ≫であったが、彼らは満足であった。
主の成長、心の在り方。
それが、彼らの意志に必要なモノ。

「行くか？」

「うん。…ありがとう」

「どういたしまして」

二度と、彼らを抜くことはない。
だが、いつまでも、彼の相棒として、そばにいることだろう。

第四回（後書き）

…ん？

刀が主人公？
あれ？

うん。

最後の視点、おもっきし刀だ…

ありゃりゃ。

まぁえっか★

ネタだしね！うん！

ということで、途中ハプニング〔こっちで〕あったものの、何とか、消えずにかけました！

ふへんw

それでは、まった明日～♪

第五回（前書き）

いじめはあかんよ。ってか、冗談でも恐怖だね。

第五回

「死ねよ」

「い、嫌だ…」

「ああ？俺が死ねっつったら死ぬんだよ。テメェに選択肢はねぇんだよ。ほら、死ねよ」

ドンッ

「死ねはないよ。死ねは…いじめはダメ。冗談も…適度にね。そうしないと、全て本気に…お前は殺人鬼になっちゃう。っていうか全員？最近の子は言葉遣いが悪い。俺はね、冗談が大嫌いなんだ。何でって、そりゃあ、どこまでが本気か分からないから」

歪んだ人情。

人の嘘、冗談、本当、真は本当に分からない。

言葉で表されないと、思っただけ、思われただけ、心に止まっているだけではどうやっても読み取ることは不可能。
ごくまれに、双子だとか、そういった関係で互いの意志が通じているものもあるけど、やっぱり人は超能力が使えるわけじゃないんだから、言わないと分からない。

でも、人へ放つ言葉は選ばないといけない。

お前にとって冗談でも…相手にとってかなりの傷を負わせる言葉かもしれないから。

「俺はね、人間が嫌い。人間の俺が言うのも変だけど、人間の…言葉が、声が、感情が、嫌い。下手に絡まる感情。複雑に混ざる心情。大嫌い。こちらに向けるのは結構。だが、あまりにも纏わりつくものであればヘドが出そうだね。今でも鳥肌が立って胸糞悪い」

綺麗な言葉しか言わない人間なんてどこにも存在しない。

「死ねは、使っちゃいけない。冗談でも。ねぇ、死ねって言って、死ぬ奴はなかなかいないだろう。だけど、中にはいるかもしれない。人間、人が言った言葉を真に受けて死ぬ人間が。または、死ねといわれ続けて、ストレスのように堆積していって…終いには爆発。そうなれば、精神が崩壊。自分が何で生きているのか。何で、そこに存在しているのか。何でここにいるのか。異常状態に陥る。分かった？人は簡単に、傷つく言葉を吐くけど、また自身もとても脆く、弱い。儚いだとか、淡いだとか、綺麗な言葉で表されることがあるかもしれないけど、俺はそうは思わない。弱すぎる。脆すぎる。人間に、儚い、淡いなどの言葉は似つかわしくない。自業自得だよ」

ねぇ、君はどう？

“死ね”

ほら、痛くない？

それとも、感じない？

人間、終わってるって言っても、心は行き過ぎている。

とりあえず、言葉は生きてる。
だから、相手のことを考えて。

そうしないと、皆…皆…死んじゃうよ？

貴方のそばから離れちゃう。

私はいつでも見ているから。

ってか、この子の方が精神異常？　笑

何となく書いてみた。

何かね、最近の子言葉遣い悪いから…
うん。

まぁ、鼎都も普通に「阿呆やん」とか使いますけどね～

うん。

ほなまた、会いませう♪

第六回（前書き）

王道ネタ…連発いってみよーか★

第六回

学園王道

生徒会長×編入生（訳有り、変装）

主人公
クール
平凡
無関心
天然（可愛い系ではなく…ただの天然ボケ）

生徒会長
美人系（腹黒）
カッコいい系（俺様、男前、無口）

★訳有り
↓組織脱会者（逃亡者）
↓国家機密所持者（能力）
↓家庭内騒動（家庭独自の力とか？特殊。異能。古）

★変装
↓族総長敵対
↓超有名芸能人（歌手、俳優、声優）
↓とある組織上位者（暗殺者、スパイ、探偵？）

入学

王道直進

非王道混じるのもよし。

「気に入った。俺のモノにしてやる」

「は？何、あんた頭でも沸いてんのか？」

「君では役不足だよ」

アンチ？
天然には不明瞭事態発生。
“恋路”

「え？はい？何が？」

「あの方は僕のモノ。二度と近付かないで」

「…？うん？」

「よく分かんないけど、無理矢理は駄目なんじゃ？」

大胆不敵な笑みを浮かべる。

「何？何なの！お前は何！？」

「何って、〇〇だけど？」

名前不明★

「お前…」

「バレちゃしょうがないよね。退学かな？」

学校自体が色々係わってる組織とかあってもいいよね★

「俺がさせない」

「あんたには十分、世話になったよ。だから、……」

「おい！」

『迷惑はかけられない。ありがとう。そして…さようなら』

「数年後の再会がこれってどうよ？」

「迎えに来た？冗談」

「俺はお前を俺の物にするっていったはずだ」

「…ばぁか」

ハピエン？

うん。

結構流したよ★

でも、王道は楽しいねw

ってことでさらばb

第六回（後書き）

しばらく王道がつづくかも♪

第七回（前書き）

モノホンは辛いようです。

第七回

鼎都の友達にモノホンのホモがいます。
というか、バイ？

女の子…と付き合ったことは…あったのか？

うん。

ホモと言っても、何か、よくある誰でもいいけど男がいいって奴じゃなくて…

偶々好きになった子が男の子だったというね。

まぁ、人生は辛いよ…ということで、片思いのまま日々を送っているようですが…

やっぱり、現実はそう簡単に上手くいくものじゃないね。

因みにその友達は攻めです。
別におかまとか、ニューハーフだとかじゃなくて、純粋な男×男としての。

んで、結構寂しがり屋なようです。

ってか、お前、その子諦めても一応一途に思う中に、ホモっ気が出てきてないか！？

って思いたくなるほど…

「男の子とベタベタしちゃう子です」

別に、深い意味はないですけどね！
男の子と男の子は普通にベタベタしてればいいよ！
この熱い中でもイチャ…ベタベタしてればいいよ！

ただね…

俺の後ろではそれをするな。

背後に人が立つと鳥肌が立つ鼎都だったとさ…

いや、ガチだよ？

背後に人とかがち勘弁。

因みに、抱きつかれるとか、勝手に触られるとかもダメ…

うん。

何かね…

鳥肌が立つんだよ。

昔、母親に…物心ついた後ね。

珍しく、「おいで」って言ったもんだから、抱きついたんだけど、

ぎゅって抱きしめられたの。

その後ね…どうしていいか分からず硬直した。

うん。

んで、友達と基本戯れるんだけど…

俺が突っつくじゃん？

ってか、自分から触れるのはＯＫというね；

相手が仕返し！で、抱きつくじゃん？

漫画みたいに、俺、真っ白。硬直。

「おーい、どした？」

「は…」

「は？」

「はなせぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！

ドンッ★

「う…」

「う？（期待の眼差し」

「うぎゃぁぁぁあああああああああああああああああああああああ！！！

ということで…

誰かに抱きしめられて…

叫び声をあげてたら

それは＝鼎都と認識してやってください。（汗）

だが…

俺は…

必死に耐えようと…努力…しているが…

不意打ちはなしだぁあああああああああ！！！

今日は…鼎都の絶叫日？

まぁいいか…

とりま…

うん。

王道ネタ連発ということで…

別ネタいこうか…

Ｌｅｔ'ｓ　Ｇｏ…

初っ端から…

リバ★

編入生×会長

会長→苦労人

生徒会他メンバーの暴走。
根源は編入生。（転校生？）

編入生総受けで、遊ぶ他メンバー。

影で会長の苦労をニタニタ笑う編入生。

「お前…！！」

「あちゃ。気づかれた？まぁいいか。優しい優しい会長さんは言わないよね？まぁ、言っても誰も信じてくれないだろうけどね」

他メンバーを手駒にした編入生の悪戯が始まる？

１８禁いいよね★

会長との欲に溺れ気味の編入生。

「何で」

「編入生？」

※名前はなし（笑）

「何でもねぇよ」

「？」

感情を露にする編入生に違和感。

何をするか分からない編入生。

何を思っているのか分からない編入生。

次第に、そんな彼に心奪われる会長。

そんな時…

編入生を奪られたと勘違い（？）、気狂い≪きちがい≫行動を起こす、ぞっこんメンバーの一人。

会長に、手を出す。

「テメェ、俺のモンに手ぇ出してんじゃねぇよ！！！」

編入生（腹黒）の怒り爆発。

「俺だって、信じたくねぇよ。ねぇけど…お前に…貪欲なんだよ」

「……馬鹿野郎」

「テメェ（怒）仕置きが必要か？ああ？」

美味しく鬼畜気味にいただかれちゃえ★

うーん

いろんな小説に感化され気味だ。

どっから来たんだろうか？

お気に入り、崩壊〔ありすぎて〕してるから、どこのネタのごっちゃ混ぜかわっかんね★

まぁ、ともかく

王道は可愛いｖＶ

では、さらばどす！

第八回（前書き）

うん。夏休みあっても…何か意味ない？

第八回

おにゃのこ…って……超絶メール返信速いのね。

送り返すの大変…

ほな本日のネタ。

ネタ？

メモ？

鬱憤晴らし？

王道…ネタ？

ＢＩＢＡ　ＯＵＤＯ！！！！！

誰にも…知られたくないんだ。

僕の秘密。

「悪魔！」

「逃げろぉお！！！」

ただの子供の遊びだとしても、“悪魔”の僕にとってはとてもとても痛い。

「お前悪魔か？」

見られた。
人間に、僕の正体を。

帰らないと…逃げないと…殺される！

「そう、怯えんなよ。俺は別に、殺すつもりはない。ただ、珍しいのがいるなと思っただけだ」

人間には、悪魔を気嫌う「エクソシスト」がおり、悪魔祓いをしている。

この人は、本当に？

元より人間は好きだった。
悪魔たちよりずっと。
仲間だと思っていたのに…ただ、ただ、低級のモノを甚振る悪魔とは全然違うから。
互いを思いやって、時に喧嘩して傷つけあっても、いつしか仲直りをする時がくる。

悪魔は…喧嘩してしまえば、喰うか喰われるかまで争う。
死というものを恐れながらも、生を小さく見ている悪魔。

「人間は優しい」

そばで見ているだけでよかった。

でも、見ててとても、とても楽しそうだったから…つい、ふと、公園に出て「僕も混ぜて」と言ってしまったんだ。

黒髪に黒目の僕は何の変哲もなく皆に受け入れられた。

だけど…

「何!?」

「ば、化け物!」

悪魔が、人間界に降りてきた。

「チッ、ガキだけかよ…」

中級悪魔。

とても敵いっこ無かった。無かったのに…

「その子らに手を出すなぁ！！！！」

愚かなことをしてしまった。

「ああ？」

「僕の、僕の友達に手を出すなぁあああ！！！！」

体が

その一瞬のことは

覚えていない。

兎に角

体が

浮いた感じがした

ということだけ。

僕は低級悪魔だから…

多分吹き飛ばされた…？

「グガァァァアアアアアア！！！

僕の手が…黒い、悪魔の血で染まっているの？

子供たちは？

「無事？」

「ヒッ！！」

「化け物ぉぉおおお！！！！！」

ああ、そうだね。

君たちにとって…僕は

“化け物”だ。

何となくさらっと書いてみた。

何が王道？

この後の話の展開がです。

優しい優しい人間の叔父さんに引き取られ、知り合いの学校へ裏口だけど入学。

そのまま、悪魔だということを隠し、学校生活を送る。

が、その学校はエクソシスト育成学校。

やばし？

そんな時、まぁ、色々出会いがあって、相手の人と親密になるけど…

自分は悪魔。

一緒にはなれない…

諦めていたとき…のこと…

悪魔にとってエクソシストは脅威。

速めに潰そうと…

毎日低級から上級、さらには特上級まで押し寄せることも。

まぁ…

結界が破れて

低から特まで一気に押し寄せるわけですよ。

“守りたい人”がいるから

「ごめんね。ありがとう。さようなら」

力解放

暴走｛？｝

全悪魔撃退。

そのまま力尽きる…

か、逃亡

バドエンか、ハピエンかはその時の気分次第。

大抵同じパターン★

うん。

青エクの影響あり？

悪魔だということを隠す。

まぁ、青エクアニメ、力解放しましたけどね！！

実は特よりも上の最上級だったり？

小悪魔ちゃん（天然っ子）は可愛いね！

皆に１８禁要素たんまりで弄られればいいよ！

弱点の尻尾を弄って弄りまくってもいいね★

第八回（後書き）

ゲフン

青エクの…ユキオ×リンはいいね！

双子の弟×兄！

激かわゆす★

しかも

人間×悪魔

ときましたよ★

人外受・け！！！

それではさらば★

第九回（前書き）

眠い…けど更新…

第九回

お昼寝は…程々に…

鼎都はお昼寝をすると…頭が痛くなります…猛烈に。

眠くても…寝ない。
けど、寝ている。

……そして、起きると

頭痛と喉痛…

ゲフン

そして、腹減っても食事が喉を通らない…うえっぷ…

それでも、寝てしまう…鼎都。

どうしたらいいでしょうね；

まぁ、そんなくだらんことは置いといて…

とりま、更新っす！

王道…連発行っちゃうか～

前の、編入生×会長の

リバ話のほか、

リバで、生徒会長受けといえば

・風紀委員長×生徒会長

・会計（他生徒会メンバー）×生徒会長

があるよね…

他生徒会メンバーは…

うーん。

庶務

書記…

まで？かな～

副会長は…色々対決してほしいという願い（笑）

ということで…

今日は脇役行ってみようか★

生徒会長×会計

「ずっと貴方を、貴男だけを思っていました」

僕は、カレにアナタを奪られてから…ずっとずっと、諦めようとしていた。

でも、できなかった。

貴方を…

愛してしまっていたから。

もし、「好き」までの感情だけだったならば諦めることはできたかもしれない。

でも、「愛す」ことをしてしまったから、嫌いになることも諦めることもできなくなってしまった。

貴方は、僕をどう思っていましたか？

僕みたいに、唯一人の愛しい存在？

それとも、数多くいるセフレの中の一人？

恋人でもなくセフレでもなく、ただ欲求不満を解消する相手？

愛の存在しない、まったく無の感情だったのですか？

交差

交差

「好きだ」

貴方は…言った…はずだった。

だけど一度も、名前を呼んではくれなかった。

いつも「会計」

いつだって僕は貴方の中では「会計」でしかなかったのかもしれない。

「あ、お前！ちゃんと仕事しろよな！」

何？

君は誰？

（王道天然自己中転入生）

君は…何なの？

貴方は何故、カレとくっ付いているの？

ワケガワカラナイ

「お前はもう用済みだ」

浅はかな、薄い夢に囚われ、すぐ近くに見えるものを見失い、傍にいるようで遠い場所に居る者を見て、追い、近くの者を見過ごす。

「ばっかじゃないの」

泣き崩れる。
しかし、誰も
手を差し伸べない。

誰も

虚無

空虚

空っぽ

何もかもが真っ白

「仕方ないか」

自分の存在は、彼にとってそれだけでしかなかったということ。

非は僕自身。

夢を見ていただけなんだ。

現実を…

……

この後の展開は…ご想像にお任せ。

うーん。

これは…

完結への道がいっぱいあるな；

誰かに心を奪われるか…

会長とよりを戻すか…

そのまま病気を持って…バドエン？

うーん

……

最近バドエンを多く考えるようになったの…

あかんあかん。

一応、ハピエンが好き…なはず？

でも、

泣けるのもいいね！

ということで、鼎都のエンドは様々です！

そういや…

こういうネタだと…

副会長もいいね！

王道ネタで、

生徒会長×〇〇だと…

生徒会長×王道外れの編入生

生徒会長×脇役平凡

…萌っすな～（はぁと

じゃあ、とりま、このへんで乙★

第十回（前書き）

ねむーい

第十回

こんば…ん……は……

おねむの時間です…

眠い…

朝から晩まで…働いた！（？）

英語って難しいね！

韓国語って難しいね！

中国語なんか終わってるね！

へー…

あかん。

舌とか、口とかのあれが、微妙に、英語の発音に慣れてまって、日本語が片言になる…；

ということで、本日分の更新。

ネタというより、さらっと書いた感じだね。
今更だけど！

今日は…うーん

王道ネタ…

秘密有り…

で…

あれか、色々あるみたいな？

俺様キャラ×秘密有り

悪いね！
俺様が好きなんだよ！

二重人格

人を騙す…

それは生きるため。

人柄を変え、人に嘘を吐いて生きてきた。

芝居をうつなど、慣れてしまえば簡単。
物心ついた頃より学んでいれば簡単。

そう。

総てが総て八百長でもしているかのように上手く行き、出来すぎていた。

それでも、

人間は、隙が出来る。

「学校？」

嘘で塗り固められ、本心がほんの僅かしかない俺にある依頼…というべきか、命令がくだされた。

学校へいくということ。

それも、ただの学校じゃない。

「暗殺者育成学校…」

特殊も特殊。
法律が世の中に存在する、今現代に「暗殺」をする「暗殺者」を「育成」する「学校」があるのだ。

尋常じゃない神経だと思う。

とか言うのは嘘で…

結構楽しそうだとか思ったりする。

「お前には結構楽だろ？学校のルール上、牙を向いてきた奴は抗っていい。無論、正当防衛で殺ってしまっても構わない」

ふーん。

というのが、俺の返事。

だって、普通じゃん？

暗殺者を育成するんだから、牙を向けてきたら即敵じゃん。

殺すのが当たり前よ。

「ただし、殺されかけても、ただ一人には絶対に抵抗するな」

「？」

「帝王と呼ばれる、学園を仕切る長、３年特組の成章雅」

ナルアキ　マサ？

「強い…？」

「尋常じゃない。１５０年の歴史の中で５本の指…否、３本の指に入るかもしれん。それほどの実力者だ」

「試す…」

言葉を少し。
大体理解できる言葉を発する。
それと、容姿を変えるだけでもかなり変わる。

銀縁眼鏡。
黒髪。
少々身を竦めた体。

それだけで雰囲気は豹変する。

元々が、たとえ、金髪碧眼だとか、かなり目立つ容姿だったとしても。

「ダメだ。彼は殺しはしない。ただし、抵抗した場合は確実に殺すだろうということ。今までに３７人の生徒が彼の手によって葬られている。学年上位者もその内の半数くらいを占めている」

「不明」

「とにかくダメだ。いくらお前が強くとも、死んでしまっては意味

が無い。絶対だ。いいな？」

彼…と殺りたい。

育成学校…

暗殺者…

……？

普通の学校？

新設校舎のように新しいわけでもなく、かと言って、歴史あるなりの古い校舎でもなく、普通に、そこらにある一般の学校のように普通の校舎が建っていた。
それが当たり前だが、普通ならば、暗殺者を育成する学校なのだから殺気の一つや二つあってもいいと思う。

見た瞬間の謎である。

その夜。

謎。

気配。

異常。

摩訶。

尋常じゃない気配に誘われ、表に出た。

そう。出てしまったのだ。

「……」

一人の男が、池の辺で月を眺めている。

今宵の月齢は１５。
つまりは満月だ。

柔らかくも多量に降りかかる月光。

明るい月光の下、彼はずっと空を見ていた。

「誰だ？」

そして、気づかれる。

去ろうとも…

「背を向ければ殺す」

その一言で、この俺を足止めした。

殺気が突き刺さる。
異常なほどの…。

「こんばんは」

容姿を利用し、戯けたように挨拶をする。

「何している？」

「その問いには正確に答えた方が？」

「身のためだろうな」

「…怪しい気配に誘われて…ですかね？」

戯けた調子は変わらない。

本当か否かは俺以外分からない。

それが、本当の俺か、偽の俺かは…絶対に。

「お前は誰だ？」

「質問攻め？っていうか尋問ですか？まぁいいですけどね。道化師とでも言っておきましょう」

「生徒…のはずだが、見たことが無い。お前は何者だ？」

「戯けた調子で話をするただの道化師にしか過ぎませんよ。真実はあなた次第」

「ふっ。俺に対してそんな調子の奴は初めてだ。大抵、俺を見て背を向けるか腰を抜かすか、媚びてくるかだ」

「媚びる？ああ、この学校の特色ですか。謎ですね」

「お前は…人間か？」

「何故？それとも、人間ではない、機械仕掛けのマリオネットとでも言いますか？」

「それも一理あるな。お前は…綺麗だな」

「冗談も程々に。私ごときが綺麗など。似つかわしくない言葉にございます」

「冗談は言わん主義だ」

「では、社交辞令ですか？それこそ、本気にしませんよ」

「まぁいいけどな」

「そうですか？では、私はこれで失礼させていただきます。今宵は月明かりがとても眩しいですから」

「また…いや、何でもない」

「はぁ？それでは、何れかまた、お会いしますときまで」

……

このパターン。

この先の妄想はご自由に。

だって、眠いんだモノ…

それでは…また明日！

第十一回（前書き）

うぬ

王道は…うん。

まぁ妄想はいっぱい★

第十一回

疲れた。

何か眠い。

まだ８時代。

でも眠い。

ということで、投稿したら色々放置で寝る！

軽く書いてみたい青春モノ。

同級生×同級生

これに、

腐れ縁

とか、

幼なじみ

とか、

家が近隣

とか、

あったら最高だよね！

主人公A君とB君。

基本仲がいい？

あいつと会ったのは小2。

あいつが引っ越してきたのが、うちの隣だった。

それから、すぐ、隣同士で、同じ小学校に通う同学年で同じクラスと言う事柄が連なりあっという間に俺らは仲良くなった。
いつも、いつも。

どんな時、どんな日でも、俺らは一緒。

小学校のクラブ活動、委員会。
中学校の部活に委員会、選択科目。
高校の選択、部活に委員会、選択科目。

常に同じだった。

それが、当たり前であり、日常。

宿題をするのも、ゲームをするのも。
買い物に行くのも、相談をするのも。

全て全て、一緒だった。

高校二年という青春真っ盛りな俺ら。
ただ、最近、あいつがよそよそしいことを除いてはいつもの通りだった。

そして、俺は聞いた。
いつもと同じように、あいつか俺の家で宿題をやるという話題から、あいつの家でやることになり、今現在そいつの自室で一つ机の上、二人で向き合い黙々と宿題をしているときに。

「なぁ、何か、お前最近変じゃね？」

「…何が？」

「何がって…最近、返事そっけないし、視線そらすし、体育か移動ん時誘っても別と行くってさっさと行くか、遅れてくるからさ。変だろ？何かあったのか？」

「いや、何もない」

「何もないにしては可笑しいだろ」

「だから何もないって」

焦るような素振りは見せないが、やはり、こちらを見ないし、ずっと視線を落としている。

返事が素っ気ないというのは周りにとっては小さな変化でも長らく一緒に居る俺にとっては大きな変化である。

絶対に可笑しい。

そう、心で思っていたときだった。

「なぁ。俺がホモって言ったら軽蔑するか？」

「ホモ？何、急に。別に…偏見がない…っていったら嘘になることもあるかもしれんけど、別にいいんじゃねぇの…。お前ホモなのか？」

「まぁな。ただ、ホモといっても、特定の相手としか考えれん。ただそいつが男であるだけ」

「ふ、ふーん……。まぁ一途なのはいいんじゃね？」

可笑しい？

可笑しい…。
別に、変ではない。
ただ、こいつなら…っていや、別に俺が気にすることじゃない…し？あれ？

「問題なのはその相手」

何故か息がつまる。
特定の相手がいて、そいつが男ということだけ。
そして、その相手が、誰なのか。
一番の大きい問題はそこ…なのだろうか？

「だ、誰なんだ？」

何故か、相談を受けている側の俺が戸惑う。
言葉が吃り、誤魔化しに用意されていたお茶を飲む。

「内緒」

「内緒って！」

はぐらかされた気分に陥り、何故か怒りを覚えると同時に焦りがこみ上げる。

何故？

焦り？

怒り？

相手をさっさと言わないこいつに対して？

男である、自分も対象内であることに対して？

自惚れているわけではない。

無論、自分も、ノーマルであるため、男に興味をもったことは一度もない。

ただ…

こいつが、その特定の相手ともし付き合うことになれば？

俺は…一人？

いくら隣といえど、男と付き合う奴。

男も嫉妬の範囲内になる。

そう考えれば、答えは近づけない。というより、近づいてはいけな

い。

そう思ってしまうのは、今までの日常の流れからか。

募る思いはただの、寂しさからか？

「相手は誰なんだ？」

「だから内緒」

わけが分からなくなる。

ただひたすら…こみ上げるのは…

「何、泣いてるんだ？」

「へ？」

バカみたいに流れつづける涙。それも異常に熱い。

そして、羞恥と何かよく分からない感情。

ただ、ただ、顔が熱くなり…

怒りなのか、寂しさなのか、悲しさなのか、涙となって溢れ出す。

「お前……」

こんなことで泣いたことに呆れたのだろうか？

幼稚な俺に…

「泣き顔は…反則だろ」

「？」

「たくっ」

よく分からない言動をとる。

机をさっさと避ければ、俺に寄り、左肩に左手を置き、右手で顎をクイッと上に向かせると、顔を近づけ舌をチラリと覗かせたと思えば、口を目元へ。

そして、

ペロッ

「ふぇ？」

「泣き顔は反則だって…」

涙を舐められた。

そう、解釈するのに、実に数秒かかる。

「え？？？」

「……泣き顔を俺に見せるな。無論他人にもだ」

「へ！？」

わけが分からない。

答えがまったく出てこない。

「はぁ…何で泣いたのか知らんが…お前に泣かれると…困る」

「？何で？」

「……俺が好きなのは…お前だからだ」

「…？……っ！？ へ…うえぇえええええ！！！？？

？？」

「うっさいわ。ボケ」

「ボケ言うな。って、え？俺？嘘だ。冗談だろ？」

「大マジだ。冗談でこんなこと言うかよ」

「いや、だって…俺…え…」

うれしい？

「……キスしていいか？」

「どうしてそうなる！」

「いや、何となく…」

「うっ…」

大型犬がすねているのを見れば自然と人情が擽られる。

「い…一回で…いいなら」

「マジ？」

「ただ、一度だぞ！気持ち…悪かったら…やらん二度と…」

「なら、気持ち良ければいいんだな」

「…？何故そうなる！？」

「気持ち悪くなかったらまたしてもいいんだろ？」

「…！！！や、ちがっ…そういう意味じゃ…」

「男に二言なし」

そして、頭の後ろと、何故か腰あたりを腕で固定し、顔を近づける。
一度、軽く唇をくっつけたと思えば、舌で、俺の唇をペロッと舐める。
その感触に驚き、口を開いた。
すると、それを待っていたかのように奴の舌がスルリと俺の口へと入る。

「ふっ！？ふんっ…んふ…ぅ…っ！！」

巧みな舌使いで、上顎など口腔を舐め回し、舌に絡みつく。
その甘く柔い刺激に俺の思考は朧げに霞んでいた。

もーいいんでない？

つか、初D？

キス自体がそもそも書かないから…

初？

うわぁ

超ハズ★

ということで、何か最近、短篇流しのようにも見えてくるこの企画。

この後、あの二人がどうなったかはまぁ分かりますね？はい。

妄想でよろしく！

ということで…乙。

第十二回（前書き）

少し歌を詠おうか。

第十二回

…やはり…一部でも無断転載。

ということで…

だらけた歌（詩？）を書いてみよう★

大丈夫！ちゃんと…ＢＬ？

ってか、最初の語りは鼎都の想像ではおにゃのこ？…；

『　ざわめき

風は大地を休む間無く流れ行き
森は草木と水流の恵みを生み
地は生命の源となり生を育む

やすらぎ

生き物は互いの生命を分け合い
自然は全てと共存し共有する
命は時に死を知り生を授かる

そして

支配

ほろぼし

強者は弱者を死にまで陥れる
弱者は強者の言いなりで全てを
支配は同族へも広がり行く

まこと　悲しき事
まこと　愚かな事
まこと　哀れな事

巡る巡る時に
廻る廻る針に

一つ　注目を

視線を　落としてはみませんか？

クルリと廻る

グルリと巡る

短針と

長針の

時計の針

時針と
秒針は

二つが一つ

廻る廻る

同じく

長針が

三万六千五百二十五回…廻れば

１００年

更に
三十六万五千二百五十回…廻
れば
１０００年
の時を経ることだろう
そして、支配者は
全てを支配し

自己の進化だけを

絶えず続ける

炎よ

風よ

土よ
水よ
木よ
雷よ
嵐よ
波よ
気よ

自然が唸らし、生み出す恵み

人≪しはいしゃ≫は利用

自分が得た

独自で得たように

我が物顔で手にする

汚らしい

醜い

それでも、

彼らは

奴等に

生を

死を

与える

優しい

摩訶に

『

時は人類が生誕してより数百万年

人々は、過去、支配者という座からおり、自然と共に互いの力を使い共存することにした。

人は、自然から恵みを受け、

人は、自然への感謝として、

人は、大地への育みをした。

そして、人は力を得た。

「炎」を操る力。

通称“焔≪ほむら≫”

人の性格、質、血の証（ＤＮＡ）より様々な色をした炎がある。

青

赤

黄

緑

紫

同色種とは言え、色の濃度も人様々。

混じりけの無い純粋且つより色濃く出る程力は強い。

しかし…

何色も、何千色も…否。人口の数だけある火の色でも一色だけ、否。
二色だけ存在しない色がある。

白と黒。

どれだけの人が生まれようと、その色を力として宿しているものは
誰一人としていない。

禁忌のような存在でもあり、神秘のような存在でもある。

白は純粋且つ純白。
それ故、染まりやすい。

つまりは、人間誰しも、最初は“白”。

染まるから、白が存在しない。

ならば、黒は？

暗黒且つ漆黒に染まる。
それ故、染まりにくい。

他色から影響を受けることは全くもってない。
されど、生まれぬ。

それは、

染まらぬからこそ、珍しい。

人間は進化と退化を続ける。

人と出会い、人と話、人と関わることで色は変化を遂げる。

つまりは…

黒は“染まらない”から、“染まる”人間には生まれぬ色。

そう。

“人間には”

もし

俺が

人間で無かったら？

「あああああああ

理性
本能
自我

失った“人”は

暴走

感情を制御できず　爆発する

だから死は怖い

死が怖いから生きる

死を知っているから生きる

生を受けたから死まで生きる

どうして、そう、必死になれるのかな？

俺の“火≪こころ≫”は…

真っ黒

何もかもが　黒に染まって
何もかもが　黒で見えなくて
何もかもが　黒で失って
何もかもが　黒によって消され
何もかもが　黒黒黒黒黒黒黒

真っ黒…なんだぁ…

光を…

照らされれば　光で、　照らされれば

白くなるかな？

見えるかな？

失わずにすむかな？

消されずにすむかな？

俺は…何？

「キミハ“アクマ”サ。　ダッテ、

“ボク”ダモン」

イ？

ほら

マックロジャナ

一応ＢＬの流れなんだよ！

こう、書くと長くなるんだよ！

ああ、そうだよ！バカだからだよ！

逆ギレして悪いか！俺の才能の無さに笑うか！

……で、でも、十分なんだし…

べ、別に、お前にネタを…て、いきょうしてるわけじゃないからな！

お、す、全ては…お、俺のためだからな！

（てか、お前誰？）

※答え

「暴走妄想日常全力疾走厨二病颯爽登場御馬鹿鼎都様★」

乙…

こ、これは、“おつ”じゃ…なくて、“ポニーテール”だからな！

お、お前なんかに…“「お疲れ様」”なんて…い、いったんじゃないんだからな！！！！

そこ、履き違えんなよ！

何か…もう…ホント…すみません…

第十三回（前書き）

ぎゃぁぁぁぁぁぁあああああああ

第十三回

ネタ…

UP

し忘れたぁぁぁ

まさかの失態！！！

ということで、日付変わっての投稿！

本当は7月30日の…投稿…うぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇんん！！！！（泣）

矢筒って…いいね！

主人公：白河　叶≪しらかわ　かなう≫

根っからの弓道少年

「白河ー、一緒に帰ろうぜー」

「ああ、悪い。これから部活」

「お前部活やってたのか？」

「うん。弓道部」

「すげぇな。渋いつかかっこいい」

「はは。ありがと」

弓道は、日本古来から有る伝統有るスポーツ。

貴族の遊技

戦乱での武器

体を動かす運動

兎に角…言えることは

「素晴らしい（キュピーン★」

矢筒を担ぎ、いざ弓道場へ行かん！

え、何がしたいって？

もちＢＬっすよ★

矢筒は

とある長さが丁度いい！

「何、爺ちゃん」

「お前に、話さねばならんことがある。お前の父は……殺されたのじゃ」

「？事故って…」

「ああ。事故と処理された。しかし、ワシは真実を知っている。だからこそ話せなかった。お前の父は“屍ノ者≪シノモノ≫”に殺されたのじゃ」

「シノモノ？って何…？」

「古より、我が白河家と敵対する影の者。ワシらを光と見れば奴等は闇じゃ」

こっから云々。

うん。

今日はちょっち急いでるから色々読み飛ばしてる感じですよ！本音言えば眠い！

「ちょ、マジ？」

一本の刀を渡される。
その刀には…

「妖怪って…」

一匹の大妖が封じられているという。

屍ノ者を退けるには、力を解放し戦う。それのみしかないという。

「明らかにおかしいでしょ」

だから矢筒よ★

「うわぁ…羽が…壊れる…」

『文句を言うな。俺だってきついんだぞ』

世の中になぜ、銃刀法という法律があるのか。
無かったら無かったで怖いが…。

え、何のフラグが立つのかって？

そりゃやっぱ

妖怪（人外）×人間っしょ！！！！！！！！！！

「ちょ、寄んな」

『俺たちの中じゃねぇの？』

「いや、だからって、ちょ…んぁ…」

まぁ、ご想像にお任せ

ほなサイナラ！！！

第十四回（前書き）

…

１４…

数字の中では…一番好き…どういう理由かは定かではない…（え

第十四回

NL…

GL…

BL…

綺麗であれば

何でもOKという

雑食な

鼎都

うーん

「〇長はメ〇ド様」

ミ〇キ君萌

〇氷×ミ〇キ君

…ええね！

あのスタッフさんもええね★

と

友達の家で

キュンキュン勝手に萌えていた鼎都でした。

しかし…

男で少女マンガは…かわゆすぎるだろ！M君（↑友達）！

しかも、何気に「碓氷さんかっけー！」って言ってるしな！！！

「美咲ちゃん、萌★」とか叫んでた気もする！

あなたも立派な萌ですぞ！！！！

生徒会長×理事長（秘密持ち）

「僕の秘密をお教えしましょう」

え、聞きたくない？
そうと言わず、聞いてくださいよ。
ただし、絶対に秘密ですよ？
腐女子の皆様はこんな僕の秘密を知ってキュンキュンしてるのでしょうけれど、絶対に漏らさないでくださいね？
漏らしてしまいましたら、折角の「萌」とやらが台無しですので。

まぁ秘密と言っても単純明解なものです。

僕は、今、高城学園の理事長を努めております「高城　優羽≪タカシロ　ユウ≫」と申します。
しかし、普段の僕は変装をし別の姿で暮らしております。
高城学園高等学部の一生徒、「高来　優≪タカギ　ユウ≫」として

高校生の青春の日々を送っています。
実際、年齢は１６歳の高校２年生。
何故、その年で理事長をしているのか。

まぁ、所謂お家の事情という訳ですよ。

「高城家」は代々、色々なことに手を伸ばし運が良かったのか様々な事に成功し、その功績を収めてきました。
高城というのは僕の実家で、その跡継ぎは長男が。
各会社の支店総取り締まりが次男。
さらにその補佐として継ぐのが三男です。

さて、僕はと言いますと、何の因果か、お爺さまが亡くなられる直前に遺書として残されたことを実行したまでなのです。

つまりは、遺書に書かれていたのは「四男、高城優羽に高城学園の理事長の席と全権利を与える」ということ。
まぁ、もっときめ細やかにびっしと書かれていましたが、まとめるとそんな感じです。

そして、そんな僕の生活に少々厄介な生徒がいるわけです。
別に、不良で荒れ狂ってるとかそんな面倒な奴ではありません。
彼は、生徒会長であり皆の憧れであり、皆が尊敬する人間であり、皆の信頼を得ている人物。
そんでもって、容姿端麗、文武両道、頭脳明晰。
性格は気さくで、生徒の人気を独占。

……まさに優等生代表な彼なのですが…。

「こんにちは」

最近、よく理事長室へと遊びに来るため少々困っているのです。
正直、僕としては学校生活を快適に送りたいのですが、彼が昼休みにひょこっと現れては雑談をして帰るということが習慣としてついてしまい、昼休みに購買へ行くふりして理事長室に戻らなければならないのです。
そして、実際、この口調もどうにかしたいものです。
理事長だから、この口調であって普段では普通に男子校生としての口調で日常を送っています。

相変わらずの、にこやかで爽やかな笑顔を振りまき、堂々と入ってくる彼。
僕は彼が苦手です。
あの爽やか笑顔の裏に何かが隠されていそうで。
今までボロを出すような事は全くありませんでしたが、その完璧すぎる彼の人柄が反って怪しい感じを引き立てているのです。
まぁ、僕の勝手な憶測に過ぎないかもしれませんが。

「こんにちは。今日はコーヒーですか？紅茶ですか？緑茶ですか？」

「和菓子をいただいたので、緑茶ですね。出来れば抹茶が良いのですが」

「そちらに和室がありますので用意させましょう。菅、宜しくお願いします」

「はい」

彼は菅と言い、僕の秘書です。
理事長としての仕事が出来ないときに彼がしてくれるため、大変助かっています。

彼は僕の言ったことをそつなくこなしテキパキとミスなく丁寧に仕事をするため大変優秀であり、ここにいることがとても勿体ない気がしますが、彼は気にすること無いといつも言ってくれるため僕は罪悪感少々と、多量の感謝を込めてお茶に誘います。

まぁ、それもこの前までのことでしたが。
彼が、現れてからは3人でのお茶会です。
でも、それはそれで楽しい気がしますが、僕としてはもっと同年代と対等の接し方と同じようにして話したいものです。

「理事長、準備が整いました」

「ありがとうございます。では、神崎≪こうざき≫君どうぞ」

「どうも」

そうして、今日も静かで、でもちょっとピリピリしたお茶会が過ぎていきます。

今までお茶会を通して彼と話している内では、彼が何を思って理事長室へ来ているのかは分かりません。
ただ、彼が自分から好んでここに来ていること、媚などとくだらないことを考えているのではないということは十分承知しました。
彼は、高城よりは劣るものの神崎家の子息。
媚びうる必要はありませんし、彼自身媚売られることをとても嫌っていますのでね。
僕もそう言った輩の醜い姿には呆れていましたから。

しかし、いくら僕が理事長とは言え、学園内では先輩にあたる方からの敬語というのは疲れますね。
僕の敬語は理事長としての肩書きを背負うためでありますが“僕”というのは少し羽目を外した感じです。
無論、外部からのお客様を相手するときは“私”です。

「では、ありがとうございました。また飲みにきますね」

「どうぞ。何時でも」

「失礼します」

そうやって、彼は帰って行きます。
しかし…

「抹茶を飲んだ後は眠い…」

「大丈夫ですか？」

「うん。嫌いじゃないから寧ろ良かった。コーヒーだけは好きになれないからな」

「彼は、貴方のコーヒー嫌いを知っていることでしょう。貴方の顔を見て楽しんでますから」

「？何で？」

「……理由は彼に聞いてみてください」

「うん？まぁいいや。じゃあ、ありがとうね。俺、戻るわ」

「はい。行ってらっしゃいませ。優羽様」

「様は止めろって言ってるだろー敬語だけは許してるけどさ」

「では優羽」

「……まぁいっか。ならまたなー」

そうして、少々忙しく緊張の糸を張った昼休みの幕が閉じます。

「もう一度…言ってくれますか？」

「何度でも。僕は理事長が好きです」

大胆不敵で、この上ない告白。
この学園が、閉鎖的空間にあり同性愛の巣であることは重々承知していましたが…まさか僕のような相手に告白をしてくる人が出てくるとは思いもしませんでした。
しかも、学園一の人気者、生徒会長神崎　志之に。

「それは、恋愛対象とですか？」

「勿論」

重要な話が有るといって、菅を下げさせたのはこういうことですか。
改めて納得致しましたが…正直、心は複雑な気持ちで一杯です。

「僕は理事長です。そして貴方は生徒です。僕の学校ですから一応同性愛について理解し偏見はありませんが、僕個人は男に興味は無いのです。なので、貴方の気持ちに答えることは出来ません」

「では、致し方無いです」

「神…崎君？」

「俺を拒んだこと後悔させてやる」

「！？ちょ…！！！！」

自主規制。

別に１８禁書いてもいいですよ！

ただ下手なんですよ！

この後、まぁヤっちゃって…無理矢理…

菅はご主人（理事長）に忠実であるため、理事長室外で待機。
中の様子は全く知るよしもなく…

脅しネタに写真を撮られ、脅され…

付き合う？セックスだけ？の仲になって…無理矢理…

そしたら、学生（高来　優）の方で色々問題が出て…

…

……

……

至るわけですよ。どっかに。

最終的にはハピエンですけどね！

これは…王道？秘密持ち王道？

なのか？

ということでさらばどす！

ねみー！！！

第十五回（前書き）

あっかん…

記憶が消える…

つか、忘れる…

第十五回

不思議な夏休み…

子供のころは

兎に角やんちゃ。

遊びたくて遊びたくて

悪戯をしたくてしたくて…

近所の公園を

神社を

寺院を

野原を
田畑を
駆け回っていた。

でも

中学に入って
友達と遊ぶことが少なくなり
一人、家の自室に篭もってパソコンの画面とにらめっこ。
良かったことは何もない。
悪くなったことは沢山。
先ず、視力。
そして、運動不足。

序でに、人間嫌い。

外を歩き、人とすれ違うだけでビクビクしてしまう俺。超チキン。

おまけに、買い物に付き合わされたときは頭の中真っ白。

画面越しの対話…主にＳｋ○ｐｅとかこえ部とか…

そんなところでの会話は普通に普通で、楽しかった。

でも、三次元になるとどうしようもなくどもってしまう。

相手の表情が…分かってしまうから。

そして…

中学１年の夏が終わり…

少々学校をサボリぎみになった。

それから、

中学2年の夏。

ほとんど部屋から出なくなった。

昼夜逆転生活に加え、絶食気味の食。

栄養をほとんどとらなかった俺は、運動不足と同時に体重が過剰減少。

女子に言えば羨ましがられたり、睨まれたりしそうだが、実際話すことはなく、二次元…画面越しでの対話をする相手だけに話すということしかなかった。

そして…

とうとう不登校になった。

仲の良かった奴が偶に家に来るそうだが…

その時は大抵、親は居らず、俺は寝ているため出れない。

嫌な奴になったなと自分でも思う。

多分、起きてたとしても対面するのが怖くて出ないと思うし。

おそらくインターホンの音でもビビる。

偶に外から聞こえる大人の声、子供の声、犬の声、猫の声、鳥の声でもびびってしまうから。

そして…中3の夏。

「オフ会？」

『そ。このメンバーで一度会ってみねぇ？って思ってさ。丁度皆夏休みだし。ぱぁーっとね』

画面越しの友達、渾名が「カズ@ゆっきー（てけとー」という人からオフ会の誘いが入った。
無論、行ってはみたい。興味はある。が、俺は生憎外に出るということに恐怖を抱いている。

顔良し。
声良し。
人脈良し。
性格良し。
頭脳良し。
人柄良し。

の、何でも完璧な彼。

今まで告白された回数、付き合った回数は数知れず。

という彼。

自分と全く反対の性格で、正直、話は合わないかと思えば、いろん

なことに興味を持っているからか、俺が分かる範囲のジャンルの話で中々気が合い、こうしてよく話している。

正直、相手の顔は知らない。
知らないが、嘘を吐くような人ではないことは承知済み。
実際、人の悪口を言わないし、軽はずみの発言でも冗談だとしても言わない。

言われてもヘラヘラ笑っているだけで、ちゃんとノリにノれる人。

まぁ俺はそんな彼が羨ましく、尊敬している。

が…この誘いは正直…断りたい…。

『日にちいつにするよ？ってか、場所どーする？皆結構集まってるから真ん中あたりで……』

淡々とオフ会について決まりつつある中で俺だけが話についていけない。

寧ろ、そんなことよりも外出についてがそもそもの問題であり、全く頭に入らないのだった。

『んじゃ、決まりなー。全員遅れんなよ！一時間前に来て一番最後だった奴に罰ゲームな！』

そんな子供っぽい発言に、皆が笑い、ボケとツッコミが入る。

俺はその中に入ることが出来ず、ただ『了解♪』という単純なコメしかできなかった。

何がしたかったのか、何がしたいのか、何が変わりたいのか…自分でもよく分からなかった。

長いので…

うん。明日というか…今日に回す！

ほな寝る！おやす！

第十六回（前書き）

やっべー

超絶眠い

第十六回

「来てしまった」

とうとうその日が。

あれから俺は、メンバーの会議に参加すること無く、チャットのメッセージだけを見て過ごしてきた。

集合は１０時。
家を８時にでなければいけない。

そう考えているだけ…ではなかった。

人ごみは苦手。
人と話すことも苦手。

それよりも、先ず、外に出ることが億劫である。

「大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫…」

必死に自分に暗示をかけているが、全く効果なし。
寧ろさらに緊張する。

駅まで歩いて…

電車に乗ったら…

○○駅で降りる…

××方面へ行って…

△△通りを進んで…

楽しそうだけど、怖い。

怖いけど、楽しそう。

どうしようもない、興奮と

どうしようもない、恐怖が

俺を襲う。

そして、その時はやってきた。

待ち合わせの時計の下。
一人の、ファッションセンスが良さそうな男性が立っていた。
それだけではメンバーの人か分からない。
だから”目印”を探す。

「カズ@ゆっきーさん？」
「おう！ってか何で敬語？瑪瑙？」
「俺だって、分かったんですか？」
「もち。声で分かるよ！」
「最初戸惑いました。何か、想像よりすごい人だったんで」
「え、俺って何だったんだろ！？」

「あはは」

陽気
気さく

とても話しやすい、気軽な人。

目印というのは、メンバーに共通するバッチ。
適当に構成されたメンバーではなく、皆に共通するものの。

「他の皆さんは？」

「敬語じゃなくていいって。他はまだ来てないみたいだぞ」

「そうで…そうなんだ」

「よし」

そういって、頭をガシガシ撫で？られる。
正直恥ずかしい。
けど、嫌な感じはしなかった。

「あ、カズだ！」

「よぉ」

「遅れましたー！」

その後、メンバーの7人が集合。
皆で、カラオケへ行くことになり、俺にとっては初めての体験で不安なままだった。

「なぁ、歌わねぇの？」
「いや、俺は聞いてるだけで十分だから」

「俺、お前の生歌聞きてぇんだけど！むっちゃ上手かったじゃん？」

「え、カズ、聞いたことあんの！？」

「聞かせてよ！瑪瑙の歌聞きたい！」

「大したことじゃないし…」

「いいじゃん！皆大したこと無いからさ！ほら！」

マイクを渡され、瑪瑙、瑪瑙という皆の声。

何かフィルターがかかったように、二次元に変換され声を張った。

適当に入れた曲。

それでも、画面と向き合うように歌った。

いつものように、自然に。

「おー！やっぱいね！瑪瑙、超歌うまいじゃん！！」

「あ、ありがとう」

久しぶりか、初めてか…人に歌声を褒められ恥ずかしさと羞恥で顔が熱くなる。

「最高だな！お前の歌。やっぱ聞かせたくなかったな」

「え？」

「いや～俺以外のメンバーはお前の歌聞いたことなかったからさ、何かもったいないな～って思って。お前の歌声独占したかったみたいだな」

「…っぷ！何か…子供みたい」

「わ、笑うなし！」

「あは、あははは！」

笑う。

笑う。

不安は消し去り…

笑う。

笑顔

貼り付けじゃない。

自然。

「良かった」

「え？」

「お前、最初見つけたときすんげぇ不安そうな顔してたし。前、外に出るのが怖いって相談受けたときから心配してたからさ。もしかしたら今日来ないんじゃ～？とか思ってたから」

「ご、めん…？」

「いや、いいよ。笑ってくれてすんげぇうれしかった。それにお前の生歌聞けたし」

「お、俺も、カズさんに会えて良かった。とても楽しかったし」

解散。

あと、1時間で、メンバーは解散する。

そして、元の二次元に戻る。

戻る。

振り出し。

巻き戻し。

また、ある？

「俺な、お前の歌に感動した」

「な、そんな…大げさなものじゃ…」

「お前の声、最初は綺麗だなとかしか思ってなかったけど…歌聞いて、全然知らない曲でも興味持って、聞くようになったけど全然感動し無かった。お前の声で歌って初めて感動が得られるって分かって…お前の声が聞きたくて…なのに、オフ会の予定決まってからお前全然来なくなって声が聞けずにすんげぇ辛かったんだよ」

俺は、その話をただ聞いてるしかなかった。
自身の事でいっぱいだったここ数日。
それでも、寂しい思いはあった。
楽しいこと。
辛いこと。
うれしいこと。
悲しいこと。

何もかも、最初は「カズ」。

最終も「カズ」。

「俺も、不安がいっぱいで…オフ会の話も本当は断ろうって思ったけど…いつも笑わせてくれる…カズさんがすんげぇ気になって…やっぱり参加しようって思って、今日出てきたんです。不安の中に、どこかカズさんに会える。カズさんがいるなら大丈夫って気持ちがあって。可笑しいですね。俺は…何を思ってここに来ているかっていえば、カズさんに会うためだけかもしれないって思うと…変で、おかしくて…」

「……殺し文句？」

「え？」

「正直ね、声だけかと思ってたんだ。人は完璧じゃないって。でも、瑪瑙、かわいいし…声もいいし…あとさ、俺、瑪瑙を知らずに瑪瑙

を見つけたときに一目惚れしたんだ。不安の中に勇気と希望があって、頑張ってそうなところを。人ごみが苦手なんだろうなって思って見てたら、こっちに歩いてきて…瑪瑙だって分かってむっちゃうれしかった。瑪瑙の声だけは忘れられなかったから。俺ね、瑪瑙が好きだよ。必死に頑張って、必死に勇気を出して、真面目に現実を見ようとしてるところとか、かわいいところか、綺麗な所とかね。ねぇ、俺と付き合ってくれない？」

「…二次元世界で生きていたような俺ですよ？こんな奴でもいいんですか？」

「お前だからいいんだよ」

抑えきれない胸がいたむ。

ドックン

ドックン

と胸をうつ、脈が今にも暴走しそうで…

恋は

知らなかった。

でも

寂しさは知っていた。

カズという存在に会えなかった数日間。

それだけでも、俺には十分過ぎる理由。

「大好きだよ。瑪瑙」

「はい。大好きです。カズ」

すべてに感謝

カズ…

和に感謝。

すべてを

楽しさを

笑顔を

寂しさを

悲しさを

恋を
愛を

教えてくれて

ありがとう。

これからもよろしく。

終わった終わったー

見事なバカっぽい短篇っぽい話。

ネタじゃねぇなー

ということでここまでサンクス☆

第十七回（前書き）

…一時…キーボードが可笑しくなった…

治った…良かった…

あ、今回完璧１８禁です（キラーン☆

１８才未満見ないでね？

むちゃくそ甘えろ、イチャコラだけど！！！

あとド下手だけど！

第十七回

言ったら何かが変わる。

何か…どころか、今までの関係が全て壊れる。

だから…俺は

この思いを言わない。

恐らく、永遠に。

主人公→　木村　諒

相手→　藤堂　結城

夏。

暑い。

ものっそい。

「諒」

「？あ、結城…先輩」

腐れ縁。

幼なじみ。

そして、お隣さん。

まぁ、お隣さんだから、幼なじみでらい腐れ縁でもあるんだけど。

一つ年上の結城に、俺は絶賛片思い中。

なぜか…知らん。

分かったら苦労せん。

結城はそんな俺の思いに気づくはずもなく、弟みたいにいつもとおりに接してくれる。

正直俺には辛い。

俺が、上とか下とかともかく、好きな人に、幼なじみとは言え接近されると辛い。

皆も恋したら分かるだろう…

もし…この心臓音が聞こえてしまったら…なんていう少女マンガ見たいなありきたりな展開では済まされない。

「お前…確かに先輩を付けろって言ったけど…取ってつけたような言い方すんなし」

「だって、高校入って急に先輩付けろとか無理だし。それに結城何か先輩って目で見れねぇ」

「お前…」

うん。
怒ったのは分かるけど…だって、俺、恋人になりたいもん。何て言えるほどの勇気はなくとってもチキンな俺には無理。

怒られる前にとんずらだぜ☆

「あ、こら！」

「悔しかったら先輩らしくしろーってんだー！」

あう。

見事な捨て台詞。

もういいよ。

どうせ俺ガキだから。

ガラッ

「諒！」

「ぎょえ！」

「お前〜！！！」

「ちょ、タンマタンマ！」

風呂から上がり、部屋へ行き、電気を点け、寛いでいた俺に急な来

訪者。
もちろん、窓から侵入するという芸当ができるのは泥棒とお隣の結城しかいない。
部屋が親の計らいで隣という、何とも言えぬ展開。

泣けてくる。

ちなみに、俺の片思い歴は…わっすれた☆

結構前だった気がするけど…自覚したのは中1？の時？
何か知らんが高校生にからまれたときに助けてくれたのが結城で、
そんときに惚れた。

いや、ありきたりとか言うなよ！？
かなり格好良かったんだって！
普段の結城と違って！ガチギレしてて、元より運動神経が良かった所為か喧嘩に発展したのに全滅させてさ！（相手6人くらい）

「うひゃう！」

「何、声出してんだよ」

「くすぐってぇんだよ！バカ！」

上半身裸の俺に脇腹の攻撃は止めろし！
俺、かなり敏感なんだよ！キャッ☆

「ほぉ…昼間のお返しだ！」

「ちょ、大人気ね！うぎゃ、や、やめうひゃひゃ！ちょ、ガチやめー！！！！！！」

あ、まずい。

「ちょ、結城やめろー！！！」

ドガン

え、土管じゃないよ？

蹴っちゃった☆

「いってー…」

「うわ、ごめん。大丈夫？」

「これ見て大丈夫に見えるか？」

「うん」

「テメェ…」

「冗談冗談！マジでとるなって！」

蹴った結城は、見事にベッドから落っこちた。
すんげぇおもしろい。

ってかね、ヤバいのは、下半身よ。

そりゃ、甘い刺激に弱いってのもあれだけどさぁ…

「お前、どうした？」

「い、いや…何でもない！ってか、早く出てけ！」

必死に隠すも、すぐにバレる。何でかって、こいつ結構下系に通ってるから。
深い意味は無いぞ？とりあえず健全な男子高校生ということだ。

「お前、今ので勃ったのかよ♪」

「ちょ、寄んな！！！」

「どれ、見せてみろ」

「やーめーろー！！！ってのの！バカ結城！」

上半身裸→ガードしようがない。

下半身短パン→え、すぐに下がるんですけど？

「お前、自分でしたことあるか？」

「ない、って！触んな！！！」

「ダメだろーしねぇと溜まって色々詰まんぞ？」

「知るか！だから触んなぁぁああ！！！！」

「嫌。お前おもしろい」

興味本位で触られても、全然よくない！！！

ってか、何、触ってんの！何で触ってんの！男のもの触っていいのかっての！

↓自分が言えた義理ではない。

「ちょ…ふっ…あ…んく！も、で、出るから！！！」

「何だ、精通は知ってるのか。ならイクって言えよ」

耳元卑怯！

むっちゃ、背筋に何か走った！

気色悪いほどに甘い、エロボに反応するってどんだけ…俺…。

重傷過ぎる。

「ふぅ…ぁあ…んぁあああ！！！！！」

さ…い…あ…く。

しかも何、今の声…キモい；

「おー出た出た。ってか濃≪こ≫。むっちゃ白じゃん」

息が整わず、荒い呼吸しか出来ない俺に何も発することは出来ない。

「おーい、大丈夫か？」

「ハァ…ハァ…だ…い…じょーぶ…な、わけあるか！！！」

必死の抵抗、

これが、幼なじみとしての絡みとか泣けてくるんですけど！
つか、地味にきつい。
あと、何か滲んでる！目に滲んでる！

「うぇっ！ぐっぅうう」

吐いたわけじゃないよ？
泣いてるんだからね？
俺、男だからね？
泣き声にエロさとかわいさを求めないで？

「ちょ、何泣いてるし」

「だ、だって…結城触るし、変だし…怖いし…」
「……だからって…怖かったんなら謝る」
「結城のバカ！」
「ごめんって」
「な、んで…」
「あ？」
「なんで…こんなことするし…」
「何でって言われても…諒が可愛かったから」
「…は？」
「だぁかぁらぁ…お前が可愛くて我慢できませんでした。昼の仕返しに部屋の電気点いたの見計らって来てみれば上半身裸で、風呂で顔赤いし、そんで仕返しして帰ろうって思ってくすぐったら勃ったらしいから…あー！くそ…バカみてぇじゃん…」
「バカ…だろ」
「ああ？うっせぇよ！もーいいだろ！俺は諒が好きなの！幼なじみとか、お隣さんとかそういうのじゃなくて恋愛で！引けよ！引けばいいさ！俺はホモじゃない！お前だけが好き何だよ！」

……

一体、この人は何が、言いたくて何を求めていて、何を言って欲しいのだろうか…

まぁバカだから…何て言ったら怒られそうだけど…

「チュ」

答えは出ている。

「は？」

「答え」

「え、なん…」

「俺も　好き」

ありえないこの展開で、ありえない両思い。

互いに、知られまいと隠していたらしい。

ただ、片思い歴が長いのは結城のほうだった。

小学校のころから好きだったとか。

バカじゃん。

幼なじみで

腐れ縁で

お隣さん。

他にどんなフラグ立つってんの……

一生、俺の中は結城だけだよ。

大好き。

うわぁ…

バカ

バカだな

バカ過ぎる

ということで…

本日ギリの投稿っす！

第十八回（前書き）

思ったけど、毎日更新のこのネタ。
いつまで続くんだろう？

死ぬまでかなぁ…

ちなみに結婚願望無

だから、多分一生腐だね☆

第十八回

ちょっとシリーズ的な感じで書いてみる。

ページ数は?。

気分次第終了。

多分数ページ?

何か×ハッカー少年

ハッカー

世界的に有名なグループ「Ｐｒｅｔｅｎｄｅｒｓ」

しかし、世界にはただ一人。

その、ハッカー集団ですら勝てない、ハッカーが単一で存在していた。

通り名を「Ｃｌｏｗｎ」

意味は道化師

どういった経緯で、そのような名前になったのかは不明。

ただ、

彼が侵入した後には「Ｃｌｏｗｎ」という文字と赤と黒の仮面をしたピエロをモチーフとしたデザインの画像が残されていた。

「吉瀬」

「はい」

「宮藤」

「はーい」

「黒赤」

「はい」

「よくがんばったな」

面倒。

見せつけるように、先生は１００点である俺に褒める言葉を与える。
反って、胸糞悪く鬱陶しい表現しか出てこない。

言わない先生もいれば、言う先生もいる。

正直、俺は自分の点数を晒すことはないし隅でおとなしく縮こまっていたい主義だから１００点がどうのこうので人の印象を晒さないでほしい。

プライバシーの侵害とも言えるのに、何を考えているのやら…

何て言ってみるが、自分自身言えた試しではない。

自分自身は何をしているのか。

勝手に人のＰＣへ新入。
情報の抜き取り。
情報の漏出。

データの破壊。
情報の入れ替え。
等など。

内容は様々。

クラッカーともハッカーともとれるこの内容。
実際、「Ｃｌｏｗｎ」と言う名の下、依頼者から依頼された仕事を遂行していた。
成功率は１００％というあり得ない数値を出しているが本当の事。

依頼主とは顔を合わせない。
仕事は速攻且つ丁寧に。
焦りを持たず余裕で。

まぁ、高校生である以上知識はそこで止まるが、コンピュータという世界共通のサーバー上では知識もクソもない。

あるのは実力と経験と運。

国防総省、またの名をペンタゴン。
世界で一番侵入率の少ない場所だが、入れる奴は入れる。
過去に若干１７歳で侵入した奴も居る。
そいつはその腕を認められそこで働いているとか…。

１６にも満たない１５の俺は、捕まると面倒だからあまり面倒な場所にはいかない…が、血が騒ぐことはある。

「無謀とか、そこらの問題じゃない…な」

ただ、画面と向き合ってしまうと色々やりたくなってしまうんだ。

子供だろう？

ピッ

ガッ…ガガガガ…

ヴゥゥン

「依頼…多い」

メールで直接ではない。

別のＰＣＩＤから作った特殊な掲示板で受け付けている。

他からの侵入と破壊は許されず、頑丈な作りである。
しかも、サイト自身のパスは特殊なもので、読み込むには最低でも１２時間。
だが、その時には既にパスが変更されておりパスが切り替わるのは約１０分。
パスに規則的なものは無く常に違った形である。

まぁ、それは俺が昔、暇つぶしで作ったパス変換のソフトだから少々甘いところもあるが別段使えないわけではなく補強を少しするだけでマシなものにはなる。

「とある企業の汚職発覚の手助け？うわーこのご時世に汚職なんてねぇ…ってか、人間って同じ事しか繰り返さないのな。学習して進化しろよ」

賄賂

汚職

着服

とか色々。
汚らしいおっさんどもがこそこそとやってる鬱陶しい手口の解決への導きが主な仕事内容。

大抵、ＰＣに入って適当な証拠見つけたらメールで関係者＋警察に一斉送信。それで終わる。

ただ…

「とある企業って、これトップレベルじゃね？」

大手企業というにはあまりにも規模の大きい会社である。

世界７８ヶ国に各国の支社があり、日本の本部と県支部と共有し世界有数の企業に成り上がっている会社。

ファッションから、ＩＴ、食品関連に、学校関連など幅広く関わっており、尋常じゃない功績を残している。

しかも、そこの会長が３０代という超発展途上の会社。

そこの息子は現在１６歳という若さで補佐につき、同時に学校の理事と生徒会長を努めているとか。

まぁ、肩書きの並びが好きそうな奴にはたまらんだろうな。

「でも、確か…この企業は特には悪いことは無かったはずだけど」

偶にある。

憎んで、恨んで、陥れるためにこういったハッカーに依頼しありもしない犯罪歴を残させ業界から消すという姑息且つ卑怯な奴が。

多分、この依頼もそういった類。

だが…

「興味が上…」

この企業にはとてもじゃないが、興味があった。

どういった会社との絡みとか、計画、企画、規模開拓、進出等など。

まぁ、俺も仕事を受けるのは興味本位だから。基本。

他の真面目な会社には悪いけどね。

ハッカーネタ大好きｖ

今、ソニーとかと揉めてるグループありますよね～

何て言ったか…ああ、アノニマス？

あの仮面、どこで作られてるんでしょうね＾＾
世界共通ってことは結構売られているでしょうけど…

真似っ子がたくさんでそうですよね～

それでは、次回もお楽しみ…に？

バイチャ☆

第十九回（前書き）

どこぞのサイト様で新規投稿しようとして…４５分くらい格闘して書いてたら…何か時間があれっぽくて…
もう一回ログインしないといけなくなったらしくて…
それ知らずに…投稿★って…

やったら…

全部吹っ飛んだ…

もう、一生使わない。そのサイト。

いや、２日後に使うけどね。多分。

書こうと思った、このシリーズ本格版。
パァだね…。（泣）

一度パァになったら二度と書きたくなくなる人なんです。
諦めが超速い★

第十九回

「とりま、ブロック自体がどんなもんか…実力試しか」

画面と睨めっこ。

会社の本部、会長室に置いてある、おそらく全データの履歴があるであろうＰＣに襲撃をかけどんなものかとお手並み拝見。

「おお～まぁまぁか」

侵入に成功はした。
ただ、ブロックの層が厚く、そこらのハッカーでは少々突っかかるであろうくらい。
まぁ上出来の範囲ではある。

パスワードの解析、侵入経路の進行、監視の類の罠の回避などを同時進行で出来れば簡単に突破できる程度。

多分、頭を2つか3つくらいに分けて考えんと出来んだろうな（笑）

そして、おもしろいことにこの会社はとあるメッセージを残していた。

辿り着く者は少ないと踏んでいるのだろうか。

それとも“ここ”に辿り着くことが出来るのはただ一人と踏んでか。

「Ｄｅａｒ　Ｃｌｏｗｎ　毎週日曜日午後九時代、会長室にてお待ちしております。○○企業会長」

うん。

挑戦状って奴かな？

会長室までいくとか冗談。

ＩＤ、指紋、情報とか色々つくんなきゃなんないし。面倒だし。

ってか、捕まったら最悪だからね。

さすがの俺でも生身は無理だよ。喧嘩したことないし。

「遠慮のメールでも送っておくか」

まぁ、俺にプライド何て無いから、逃げたとか言われたってどうでもいいけどね。

「はは。“彼”から断りのメールが送られてきたよ」

「逃げたか」

「いや、彼のことだから多分“面倒くさい”で片付けたんじゃないかな？」

「気分屋」

「そうだね。でも、正直やっぱり彼が欲しいね。彼の腕があれば様々な企画において有益を得ることが出きるだろう」

「全く。そんなことといって、興味が一番あるんじゃないか？」

「まぁね。龍も彼について色々探ってみたらどう？」

「だれがやるか。俺は自分に得しないことはしない主義なんでな。何でも興味で動くようなクソジジイと違って」

「反抗期ってやつかな」

昔は「パパ」ってかわいかったのに…

と染み染み、会長室から出て行った息子の背を見送り心なしに嘆く。

「さて、彼は…どうするのかな」

“彼”限定に送ったメッセージ。

恐らく、敵会社の多い我がグループへの逆恨みの依頼が殺到しているであろうことを予測し仕掛けた罠でもなければ依頼でもない。ただの挑発。

正直、罠といえば罠とも言えるその言葉に彼が果たしてくるのかどうかがこれからの課題である。

面倒くさがり。

しかし、子供っぽい挑戦心。

もしかしたら、世界の“道化師”はまだ成人とも言えない少年なのかもしれない。

「やってしまった」

今、彼はとあるビルにいたりする。

１５にして１７０以上の身長と大人びた外見から、あっさりとＩＤ、個人情報を摸作し簡単に潜入できたりしていた。

元よりの容姿が無ければ潜入など不可能だったのかもしれない。

「はぁ…」

正直言おう。

疲れる。

「だが、来てしまったものは仕方ない」

と、会社員に化け堂々と廊下を歩く。歩く。歩く。

少々顔に細工するだけで、１５歳の顔が、２０歳以上の成人男性に変貌したりする。

ビルの中に入ってしまえば簡単。

日曜日の午後九時に会長室へいけばいい。

それだけである。

別に、特別な鍵が必要というわけではない。

ビルに入るときだけに必要なＩＤだけを持っていればあとはビル内では自由。

「全く。外部のガードさえ緩いのに…」

それはＣｌｏｗｎだけが言える台詞。

ハッカーといえど、そう簡単に侵入を果たしてしまえばその会社は終わりである。

そこで、セキュリティ会社などの業者から専門家を呼び外部からの侵入を防いでいたりする会社が多い。

しかし、そんな専門家の技術もＣｌｏｗｎにとっては玩具の南京錠同然であった。

「…面倒」

監視カメラはあるものの、外見から言ってただの会社員。

まぁ、ただの会社員が会長室にくるなど絶対に無いだろう。

「まぁ俺はいくけどね」

挑戦を受けに。

正直言って、捕まるということは絶対に考えなかった。

会長殿はかなりの興味主義者であり、あくまで俺個人に興味があるだけだった。

それだけであるため、捕まるという要素は無かった。

まぁ、捕まるというより利用するという目的で何かしらされそうだが。

コンコン

「はい」

「〇〇課の黒赤≪くろか≫と申します。会長が指示し企画したイベントへの意見を課代表して受理していただこうと参りました」

「どうぞ」

「失礼します」

全く。

何だろうね。
この異空間。

「初めまして」

「どうぞ、おかけください」

「ありがとうございます」

遠慮なく、どさっと、不躾に座った。

「会長室って他と全く違うんだな」

その言葉に、目の前の男は過敏に反応する。

「ああ、やっと…来てくれましたか？」

「全く、面倒なことを」

「自己紹介…と致しますか。私は…」

「ああ、別にいい。面倒だ。そっちも俺のことは知ってんだろ？」

「もちろん。この日を夢見、どれだけの時間を…」

「だから来てやっただろ。んで、俺に何かあんのか？」

「我が企業の管理者になってもらいたいのです」

「やだ」

「ただとは言いません。よい環境にそれなりの報酬に衣食住欠けること無くその身の安全も最大限に考えた仕事内容で着いてもらおうと思うのですが…ダメでしょうか？」

「俺は面倒なことは嫌いなんでね。お前と同じように自分の興味でしか動かない。そこは理解しているだろう？」

「まぁ同じですけどね。ただ僕は僕自身の興味のためならば何だってしますよ」

「は。嫌な言葉だ」

「もう、ここに来てしまったからには帰れるとお思いで？」

「何、束縛に監禁、拘束に拷問でもするか？」

「まぁ近いことなら。ある意味拷問よりひどいかもしれませんね」

「どうでもいいな。お前の企業が堕ちたくなければ俺に手を出さないことだ」

「大丈夫ですよ。僕の会社はつぶれませんから」

「丸でお前は狐だな」

「よく言われます」

「人を監禁したとなりゃ、警察もさすがに色々するぜ？」

「立場的に貴方の方が危ういのでは？」

「たかが１５、６のガキがハッカーと言って通じるとでも？それよりかは、俺のある程度富んだ家柄に多額の請求を吹っかけた身代金目的の誘拐の方が通じるだろうよ」

「…え？ちょっと待ってください。貴方今…」

「誘拐？」

「いえ、年…」

「15、6？」

「貴方は何才なんですか？」

「今年16」

「……」

鳩が豆鉄砲くらった顔。

おもれぇ。

「ちなみに本当。今年高校一年生だったりな」

「……僕の息子より年下とは」

「英才教育受けた息子は反抗期みたいだしな」

「はぁ、本当ですよ。全く」

「んで、開放してくれんの？それとも、やっぱり監禁？」

「後者に決まってますよ。ここで、逃すとでも？」

「やっぱり悪趣味」

…

あれ？

フラグ立った？

まぁいいや。

ほなまた次回！

おつっす★

第二十回（前書き）

うーん。早２０日目。

一つ聞かせてもらう。

これは……短編集か？

第二十回

１８禁の…練習…んー？

ただ、１８禁はやはり恥ずい&正直色々言葉にするのが面倒であるため…

避けて通る。

よって、１８禁は無。

「ちょ、やめろって！！」

「いいじゃん。似合うんだし」

「止めろ！」

「そんなことといわないでさぁ？」

「こ、こんの変態野郎がぁぁあああああ！！！

状況を説明しよう。
喧嘩の術を全く知らない俺は変態に捕まってしまい、しかもその変態はどうもアニメ好きのオタクらしく…

コスプレをさせられている。

「うわぁ♪ピーーーー（某アニメ）のピーーーー（主人公）だよ！超萌だね★」

何がうれしくてこんなコスプレを！

「さてさて、写真撮影を！！」

「や、止めろってのぉお！！」

「うるさい。何を…して…」

「おお！愛しの我が息子よ！どうだ！この子が例のハッカーだ！かわいかろう！？」

……ねぇ…俺もう死にたい…。

「……はぁ…どうでもいいから静かにしてくれないか。テメェが怠った仕事の始末でこっちは寝てないんだ」

「えぇ！？こんな可愛い子放置で仕事できるの！？ありえない！」

「ありえないんはテメェのほうじゃぁあああ！！！」

とりあえず、あれをやってみた。

ほら、アッパーカット？

みたいなの。

「いった～…うぅ酷いよ」

「触るな寄るな来るな呼吸するな消えろ存在するな！」

「うわぁ…酷い…パパ、息子にも言われたこと無いのに…」

「んなこと知るかぁあああ！！！！！！！！」

今日…何か、俺…発狂してばっかな気がする。

もう…寝よう。そうしよう。

「あ、じゃあ、次こっちね！」

「まだあるんかい！！この変態！！！！！」

「うるさい…」

何か…

異様に息子のほうが落ち着いてるのは…分かった気がする。

こんなオヤジは絶対要らない。

あは★

やっぱコスプレ？

別に鬼畜祭りでもよかったんだけどね！

ただね、やっぱ羞恥に溺れる奴がいるからね！

うへへw

どこぞの世界から取り寄せた生物で…グへへへエへへへへへ★

ほな、また次回★

第二十一回（前書き）

最近の祭りは…あれだね。

かなり静か

んで、お年寄りと若者で…分かれてる。

第二十一回

天女が降りてきたのかと思った。

太鼓と笛の音色が荒々しくもなめらかに連なる音楽を奏でる。

誰よりも高い場所で踊る彼女。

白い着物に身を覆わせ、ゆらりゆらり揺れ舞い踊る。

そんな神秘的な姿に一目惚れをした。

彼女に会いたい。彼女と話してみたい。

しかし、その願いは叶わない。

「はぁ？」

「……」

「一目惚れ…しかも、祭りの最中の踊ってた子に…」

「悪いか」

「いや、だって、お前今までホモで、女なんか嫌いだぁ！って言ってたじゃん」

「うるせぇ…」

翌日の事。

男子校に通う俺は、友人に相談をした。

男子校であるためホモは珍しくなく、特に気にせずオープンに振る舞っていた。

「んで？それってどこのお祭り？」

「〇〇市の〇〇祭り」

「あーあそこは…あのてっぺんで踊る子は…5、6人いたかな？多分連絡つかないと思うよ」

「はぁ…だよなぁ…」

「まぁ、踊ってた子、可能性の場合だけど来年出るかもしれないか

ら来年も見てみれば？」

「…そうする」

「そうしや」

何て、特に展開を広げた会話をすることもなく時は過ぎる。
その友人があたふたとしている様子など気づかずに。

「女装…してみない？」

「はぁ？」

「祭りのね、頂上で踊ってくれる子がいなくて、困ってるの。純ちゃん、日本舞踊やったことあるし踊れるでしょ？それに、踊るのは夜だからそんなに顔を見られること無いから女装しても気づかれないと思うの。いいでしょ？」

「いや。何で…」

「やってくれたら駄賃として2万円」

「やる！」

「そう。ありがとう～♪じゃ、また日にちが来たら詳細を言うね～」

2万円という、報酬が貰えることに食いつき、女装＋踊るハメにな

った俺。
にしても、金のためとはいえ…女装…。
まぁ、その日限りだから…ということで許したのだが…まさかね。

「俺さ…一目惚れした。祭りの最中に。踊ってた女の子に…」
「はぁ？」
「……」
「一目惚れで…しかも、祭りの最中の踊ってた子にってか…」

「悪いか」

「いや、だって、お前今までホモで、女なんか嫌いだぁ！って言ってたじゃん」

「うるせぇ…」

○○市の○○祭り。
そして演目○○。

え、俺じゃね？

ちょ、マジ？

勘弁してよ。

その時は流れのままに流したが…正直…辛い。

実はその女の子は俺でした☆

いや、別にいいんだけど、何か引かれそうで怖い。
怖いってか、友達失いそうだし。
でも、長く引っ張れば引っ張るほど…あれだし。
何て考えてみたりもするけどやっぱり無理で…。
結局の答えはどないしようってことになる。

「あ〜…クソ…」

「どうした？」

「会いたい」

「……」

「何だよ！」

「いや…もし、その女の子に会ったとしたらどうするつもり？」

「告る」

「あ、そう。まぁ無理じゃないかな」

「でも告る」

諦め悪。

ってか、こんな頑固なやつだっけ？こいつ…。

「ただ…女の子ってのあんま知らねぇんだよな」

「ぶっ！はぁ？」

「だって、今まで女子に嫌悪抱いてたから近づかなかったし興味無かったし」

「……バカだろ」

「男だったら案外簡単に事進んだかも」

こいつ、相手が男だって分かったら押しに押しそうだな…。

「はぁ…」

ため息が出る。

例の女の子。

女子に元々嫌悪を抱いている俺は、正直恐怖の塊である。

もしかしたら、その女の子は男の子なのでは？とか思ってみたりもするが、その祭りは女の子しか踊らないため女の子と必然的に片付けられる。

そして、最近の問題は…

友人、純の動き、姿がその女の子とかぶるということ。

どれだけ飢えているのか、友人にまで欲を向けてしまう。

いっそのこと…友人に…何て考えてはみるがそれこそ嫌われる原因。

友人とは友人として付き合っていきたいもの…

どうすればいいのだろうか？

気分によっちゃ、もういっちょ。
このまま貴方さまの妄想に任せるかもしれない。

それでは乙☆

第二十二回（前書き）

あーあ。やっちまったよ…やっちまったなぁ…やっちまったぜ…

第二十二回

はぁ…

面倒くさい。

面倒くさい。　けど、

やっちまったもんは仕方ない。

Mペを解除して…えー…あ、ナノで、サイト作り…

色々…面倒だけど…何かもとよりの性か…せっせとページ作って、機能を作って…貼っ付けて…わけも分からん数字と英語と記号の羅列を何度も顧みて…

無駄に頑張っております。

……どうせ長続きしないのにね。

ほな、更新どす。

王道というか…うーん

そろそろネタが付きそうだ（はや！）

「まぁ、とても凛々しいこと」

「……」

「ねぇ？夕？」

「いえ。お褒めいただき光栄です」

「まぁ。こんな素敵な方なら喜んで夕をお嫁に出せるわ」

「そんな」

…んなわけがあるかぁぁぁぁあああああ！！！！！！！！！！！！！

何て、一人、背中に冷や汗を滝のように流している「俺」は、夕という男か女か分からない微妙な名前故、ただいま女装をして、何という、自分の“お見合い”に来ている。

そう。俺は男だ。

女装をしてまで、何でこんなお見合いに来ているかと言えば、母の所為。

母が本物の愛を確かめるのよ！とか言って、試しているらしい。

まぁ、俺が男だと分かった瞬間に色々やばいだろうけどな。

「夕さんも、こんな俺で宜しければお付き合いしてくれませんか？」

「……」

「ほら、夕、いいじゃない？素敵な人よ？」

「は、…はい」

俺オワタ☆

「では、御義母様俺たちはこれで」

「ええ、ええ！素敵な夜を過ごしてね♪」

ちょ、母さん？ガチでいってんの！？俺死ねるよ？今軽く死ねるよ？

「夕さんどうぞ」

「はい…」

声が出せない。
いや、元々微妙な音程であるため普通に声をだしても、女として通ることもあるけど…正直どもる。

バタンとしまった扉の中はとても豪華。
さっすが金持ち。

一般庶民の俺が何でこんなお見合いに…（泣）

因みに言っておこう。

こんな展開あり？って話になるが…

俺は「ゲイ」である☆（キラーン

まぁ、女の子を抱いたこともあるけど、男がいい。

あれだ。女の子はちょっと色々やばい。

悪い意味で。

んで、確実にこのモテル男は俺のタイプ。

どもる口調も、相手の所為とまぁ自分の正体からであったりする。

これで振られるとかね。結構辛いもんよ？

てか、相手様の両親大丈夫なんかなとか思う。

いや、端から付き合えるとか想像してなかったけど、もし俺が男だとバレたときにはおしまいよ？

「夕さん」

「は、はい！」

「そんなところで立ってないで、座ったらどうです？」

そういって、自分の隣に座るようソファを指すこの男はまぶしい。

「し、失礼します」

「そんな固くならないでくださいよ。恋人同士なのですから」

「あ、あの…その、大変申し訳ないのですが…その、貴方とは…」

「……くっ！あっはははは」

「え？」

「あークソ笑った。お前、俺と付き合えない理由、自分が男だからとか言うのか？」

「…え？へ？」

「俺が男と女を見分けれねぇわけねぇだろ？この俺に不可能はない」

…え、何、このキャラ。さっきの超好青年はどこいった？超俺様に

変わってんぞ？

「まぁ俺はお前を気に入ったけどな。離す気は無いぜ？」

といって、隣に座る俺の腕を掴んで、仰向きに押し倒す。
え、いや、いいシチュエーションだけどね？色々とやばくないか？

「そんな慌てるなよ。恋人同士だろ？」

「いや、んなこと言われても！っ！！」

パクッ…？

バクッ…？

ガプッ…？

まぁそんな感じの表現ができそうな感じの噛みつかれるようなキスをされる。
突然の事で、状況把握ができないまま流される。

「ちょ、ふっんっ…ぁ…ふぅ…」

「エっロい顔。キス一つでこんなんかよ」

「な！！」

「下も…勃ってるみたいだし？」

「う、うっさい！バカ！変態！」

「その、変態に犯されそうになって、しかもおっ勃ててるのはどこのどいつだよ？」

「う！…うぅ…」

「にしても、女物の着物は面倒だな」

え、まさかの続きやるけぇ（系）？

マジ、勘弁してぇぇぇぇぇぇ！！！

主人公何でいやがってるかは…うーん。

結論付ければ…相手が相手だから。

初対面

俺様

流れ

Ｄｋｉｓｓ

まぁ、そんなこんなで流されるわ、Ｄキスされるわぁ、相手は何か

意味不明だけどかっこいい…って混乱してて、ちょっとそれどころじゃない…て感じ？

結構手抜きだね！今回！

いや、もう。

ネタが尽きそう…

ちょ、頑張って誰か萌を！！！

第二十二回（後書き）

ネタ尽きたら短篇でも書くかのぉ…

第二十三回（前書き）

ふふ…

ふへへへ…

ふはははははは！！！！！！！！！！

課題など

知るかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！

第二十三回

ナノのサイトにて新しく…小説書いてるよ…

まぁ…まだ出だしだけだけどね！

阿呆なことやってるよね！

……

両立すらできないくせにねぇ？

何か…

自分で言っててて虚しくなるな…

萌…

萌…

萌ぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！

ねぇ、君は誰？

俺か？
俺は“　　”さ。

へぇ。
僕の事向かえにきたの？

まぁ、そうだな。
お前の“　”が尽きるまで。

時間、あるの？

少し…くらい？
お前が“　　”考えれば。

冗談。
覚悟はあるよ。というか、もう諦めた。
だって、どうせ“　　”…。

ほぉ。
お前は望みを捨てたのか。

“　　”っていうあんたに言われたくないよ。

おうおう。
強気だなぁ。
そんな“　”で。

だから諦めたって言ったじゃん。
何、頭理解能力無いの？

はは。
ここまで俺をバカにするのもお前くらいだ。
おもしろい。

何？

おまじないさ。
これで、お前も外に出れる。
出てみるか？鳥かごの中の小鳥さん？

うるさい。
僕は小鳥なんて名前じゃない。

ああ、そうだったな。
ことみちゃん。

ちゃんをつけるな。

（バカじゃないのか…）

どうした？

何で、もうすぐ“　　”のに…
ここまでする？
そして、何故、笑ってる？
僕はもう諦めているといっただろ？
ここまでする必要などどこにもない。
お前はただ自分の役目をただ待っているだけでいいはずだ。

だって、お前、すんげぇ変な顔してるからさ。

変な顔？
そりゃあ、自慢できるほどの顔はしてないけど？

違う。
諦め、絶望、拒絶。

お前は、“　”を諦め“　”を受け入れようとしているだけ。
ただ上辺なだけなのに、目の奥、まぁ心の奥では諦めきれていない。
その証拠に、外に出るの拒否しなかっただろ？
何も興味がないなら、出ることもないだろうよ。
暇つぶしと言えど、出れば興味があるということだ。
そうだろう？

……何で…

はは。まったく。
お前、諦め切れてないんだろ？
“　”よ。
まだ、お前は“　”ない。
“　”までにはまだ時間がある。“　”。

うるさい。
うるさい！
お前に言われなくとも…僕は…僕は“　”！
“　”みせるさ！

おうよ。
“　”時は、俺みたいに“　”にでもなれよ。
こうやって、無駄な“　”が狩られないようにお前も守れよ。
“　”は“　”を狩るのが仕事じゃないのか？

違う。根本的には一緒だが、その前に、こうやって説得して“
”させる。
それでも諦めてるやつには“　　”あとに苦痛がやってくる。
つまり、人間で言う地獄だ。
少しでも多くの“　”を救う。それが本当の“　　”だ。

ある意味正義のヒーロー？

そうだな。
それじゃ…そうだな。時間だな。
お前はこうやって諦めず先に進もうと考えたから…俺は用済みだ。
新しい仕事をしないとな。

…待て。

うん？

お前の…
お前の名は？

“　　”

違う！
本当の…名前…
うーん。じゃあ、こうしよう。
？
また会ったときに言う。
それでいいか？
…会えるか分かんないし。
お前が精一杯生きて、ちゃんと生きれたら会えるさ。
またな。
“　”…ありがとう。
……どういたしまして“　”
！！
あ、待て！！

初めまして。教官の“　　”です。

…初めましてじゃねぇだろ？“　　”。

はは。そうだな。
ちゃんと生きたんだな。

あれから…お前を忘れられなかった。
バカみたいに、お前がそばにいることが当たり前な気がしてて…
お前がいないから…寂しさを覚えた…悲しさを覚えた…
そして、お前がいなくなってから、楽しかったことをうれしかったことを覚えた。

それは愛の告白？
俺無しでは生きていけない？

…“　　”。
俺は“　　”ぜ？

心なしか、口調も変わっちゃって。
まぁ、俺はお前に会う前から好きだったけど。

はぁ？

お前の“　　”としての仕事ついたときは運命を呪うと同時に感謝したね。
好きな奴と居られる。
期限付きだとしても、自分が“　　”ことの大切さを教えられる事に。
そうして、今、現にここにいる。
最高の気分だ。

バカ。

バカはお前だろ？
俺バカなくせに。

うっさい。

ほら。まぁとりあえず、宜しく“　”。

宜しく…“　”。

うわ、てれくさ！！

（怒

“　”の中は適当にお入れください。
といっても、まぁ鼎都の妄想…？
いや、何かクイズ形式的な？
うん。
ただ、空白を作ってみただけなんだよ…
うん。
このＣＰのキャラ設定が分かった人。
すごい。
のか？

うん。

まぁ、会話だけだったからなぁ…

すんげぇ分かりにくいと思う…

まぁいいね！

ほなまた次回★

第二十四回（前書き）

うーん。

まぁいいのかね？

第二十四回

鼎都はよく友達に愚痴られます。
別にいやではありません。
むしろ…バッチコーイ★

いや〜
なかなか、愚痴を聞いてるとツッコミ満載というね。

溜め込む子ほど…うーん。
撫で撫でしたくなる。特におにゃのこ。
男の子でもかわええよね！
ということで、

まぁこれは、相談を受けた子からもらったネタです。

何で…何で？

「ぎゃぁぁぁあああああ！！！！」

あいつは！！

いつも！

「や、やめろぉおおおお！！！！！！」

俺を

「ひっ！よ、寄るな！来るな！」

苛める！！

「何で～かわいいじゃん」

棒の先には毛虫。

俺は虫が大っ嫌いだ！！！！！

事の始まりは、入学してから数ヶ月。

なぜか、妙にあいつが懐いてきて、微妙に鬱陶しく思えたから避けたり、軽くあしらったり、無視するようになった。

元々、あいつはモテて、しかも友人はたくさん。
いつも女の子や取り巻きたちがいて…

それに対して俺は地味で、根暗で、友達も少なくて、特に話をする相手もいなくて全くの正反対な人柄。
愛想がいいあいつ。
愛想の無い俺。

とっくに、話すことはないだろうと決まっていた。
それは、もう必然的に。世界が違いすぎるから。

だけど…

「なぁ、お前、朽木涼って言うんだろ？涼って呼んでいいか？」

始まりはあいつ。

あいつが、取り巻きを放置して俺に声をかけてきたことが始まりだった。

それからというものの…

「朽木おはよ～なぁ、宿題見せて？」

「朽木～パン買ってきて？」

「朽木～一緒に帰ろうぜ～」

パシリ同然。

普通のように思える“一緒に帰る”は、普通ではない。
あいつの話を帰る途中ずっと聞かされ、しかも虫嫌いだと分かった俺に対して虫を捕まえては持ってきて見せたりと…

とにかく、俺の嫌なことばかりしてくる。

そんなあいつが、俺は“大嫌い”だった。

そして、ある時言ってやった。

「お前なんて、大嫌いだ！！！」

あいつは離れた。
しかし…

「あんた最低」
「あんたから近寄ったんでしょ？」
「お前、最悪だな」
「なぁ、あいつ、ヤバいらしいぜ？」

俺の噂が立つ。

あいつの取り巻きたちによって。

教科書がゴミ箱に。

物を壊されたり。

掃除当番を押し付けられたり。

自分らの問題を責任転嫁したり。

最悪、最低、散々な日々が毎日…続いた。

「ああ、あいつ？だって、明が言ったんだもん。あいつムカつく～って。だから当然の報いでしょ」

言葉を失った。

ムカつく。

それはこっちの台詞。

つまり、何だ？

あいつが、俺に対して“ムカつく”から俺への“いじめ”をさせているのか？

何だそれ。

俺が何をした？

俺が何を言った？

全て俺の所為かよ。

どんな奴だよ。

あいつこそ最低じゃん。

「…」

あー…最悪。
例によってあいつが残ってるなんて。

その日、委員会で残っていた俺は、最悪な事に、誰もいないはずの教室であいつと会った。

「なぁ」

「……」

話しかけてきた。

そして、話を切り出したのも。

「何か、お前元気なくね？」

「……」

あいつは何事も無かったように、俺に話しかける。

何も無かったように。

「なぁ、俺が何かしたか？」

…

「テメェ本気で言ってんのか？」

思った以上に低い声が出た。

苛立ち、ムカつき、全てを吐き出したくて。

「それはこっちの台詞だ！俺が何をした？俺が、お前に何かしたか？お前が嫌がるようなことをしたか？何かしたんだったら言え。真っ正面を向いて言え。影でこそこそこそこそと。テメェには真正面向く度胸もないのか！！！」

怒りが募り、頭が真っ白。

全てを吐き出せば、息が切れていた。

そして、涙。

全てを流すように。

「え」

その言葉に驚く。

「影？って何だ？」

「テメェが、取り巻きに命令でもしてんだろ！？毎日毎日嫌がらせしやがって！！！」

「何だそれ？」

「は？だから、テメェが、ムカつくとかどうとか言って、嫌がらせを…しかけて…」

「誰が言った？誰がそれを言った？お前に嫌がらせしてんのは誰だ？」

…

話がかみ合わない。

どういうことだ？

「すぐつぐすぐ」

「え、いや、だから」

「俺のお前に手出したんだから当たり前だ」

「俺は物じゃねぇ！つか、俺のって何だよ！」

「お前は俺の物だ。それ以外に認めない」

「はぁ！？ってか、もうたくさんなんだよ！パシられるのも、遊ばれるのも！もうたくさんだ！」

「遊ぶ？パシる？俺がいつ？」

「だって、お前…今まで…」

「ああ、だって、好きな奴そばに置きたいじゃん」

……こいつ頭いかれたか？

「取り巻きのことは悪かった。そして、今までも。俺ガキくせぇから…ああいう方法しか知らなかった。好きな奴苛めて、俺に気を向かせる。そしたら、お前に俺のことが根付くから…」

「普通、好きな奴には…やさしくするもんじゃねぇの？」

「俺は、愛情を知らなかった。好きになるって事を知って…お前を好きになって…言い訳かもしれねぇけど…親には愛だからこそお前を殴るんだ！お前を愛していなければそんなことをしないって言わ

れて…好きとか、愛してるんだったらいじめることが当然って思ってた。違ったのか。違うんだな。俺はお前が好きだ。お前が言うんだったら俺はお前にやさしくする。やさしくってのもよく分からないけど…お前が教えてくれないか？」

子供…みたいに泣きじゃくるこいつ。

ガキくさく、涙ぐむこいつ。

何故、俺は“惹かれて”いる？

「泣くなよ…お前、せっかくもてるんだからさ…今までの行為が、好き故に起こして、悪意がないなら…俺はそれで納得するよ。ただ、俺は男だ。お前も男だ。そこは…」

「理解してる。俺だって、人間を好きになったことが無いけど、男を好きにならないはずと言う常識は一応ある。結ばれるのは男と女だ。でも俺はお前を好きになったんだ」

「恋愛に、年も国籍も、性別も関係ねぇってか？」

泣いた後の、しょんぼりとした顔が忘れられなくて…

捨てられた子犬のようで…

とても“愛らしい”…。

どうやら、俺もこいつに“恋”したようです。

因みに、これ、共学の普通校。

これより先の展開は、まぁ男同士という一応の常識を持っているため、隠しながらいちゃこらします。

取り巻きには怒りの鉄槌を下し…

まぁ、一応ハピエンに終わるわけですよ。

ほな、乙です♪

あ、やっぱり花火はいいね！熱い（暑い）けど！

第二十五回（前書き）

青春はいいね…

年はとりたくない…

そして、眠い。

眠ってしまう…夏眠…

第二十五回

あいつはバカだ。

特進クラスにいるくせに…そもそも、何故特進クラスに在籍できるのかすら分からない。

勉強も運動も全く出来ず、あいつはいつも一人で、どこか遠いところをいつもいつも見ている。

窓際の席であるため、窓の外をいつも見ている。

授業にまともに参加したこともなく、当てられても大抵は無視か、「分かりません」と答える。

それが、ただの意見交流だとしても。

何にも関心を見せないのである。

勉強にも

運動にも
人間にも

全てに。

では、あいつは何故外を、“空”を見上げているのだろうか？

「テメェ特進クラスにいるからって調子のんじゃねぇぞ？いつもいつも、学年最下位のくせに何で…」

「どうせ、親に大金叩いてもらって裏口入学したんだろ？姑息だな！」

一人、３人の男に囲まれ、バカにされている男。

旭　零≪あさひ　れい≫。

家庭は中流。
学力は学年最下位。
運動もてんで出来ず。

まさに“ダメ男”の代表とも言える姿。
ファッションにも興味がないようで、髪は床屋で適当に任せて切ってもらっているようで少し襟にかかるくらいの長さ。
銀縁だとか、黒縁だとか、最近ではシンプル且つ受け狙いのような眼鏡がファッションとして若者に人気だが、そんなこと関係なくシンプルというだけで使っているような黒縁眼鏡。

制服も、ブレザーなのだが、ネクタイは適当に緩め、第一ボタンを外しているだけで、あとは何もしていない。
アクセサリーなどもってのほか。
若者に欠かせない携帯電話を持っているところなど誰一人として見たことが無かった。

そんな、時代遅れの彼。

無表情で、愛想無く、普段の様子から人は寄ってこない。
書類提出も、真っ先に先生に出しているらしく、回収の際、先生から「あいつは出してるから回収しなくていいぞ」と言われる。

そこまでして、人と関わりたくないらしい。

端から見れば不気味すぎる。

それでもって、“バカ”といわれ、特進クラスの愚者と呼ばれることもある。

「やっべ。遅くなった」

部活動が盛んな文武両道のこの学校。

陸上部に所属する俺は、部活後に忘れ物を取りに教室へ戻った。

そして、不思議な彼と出会う。

何にも興味を見せない、あいつ。

だけど、今、あいつは何をしている？

机の上には最新の薄型ノートパソコン。

元々、学校全体にネット回線が繋がっているためプラグを挿せばすぐにインターネットができるようになっている。

そして、目に入るは彼の手。

パソコンのキーボードの上を滑らかに動いている。

それも、途轍もない早さで。

滑らかに見えるのに、カタカタと音がなる。

誰もいない校舎、そして、教室。

辺りは静寂に包まれ、そのカタカタとなる音だけが、そこに存在を示すように階に響く。

思わず、聞いた。

「お前、何してるんだ？」

しばらく、返事を待つ。
だけども、思ったとおり、返事は返ってこなかった。

しかし、タンッと一つ、大きな音がしたと思うとあり得ないと現実を見れないことが起きる。

「仕事」

彼が、質問に答えたのだ。

普段聞かれても「分かりません」の答えしかでない。

まわりでも「分かりません」という言葉以外声を、言葉を聞いたこ

とが無いというだろう、そんな彼が。

「仕事？って、つか今俺の質問に」

「お前が聞いたから答えただけだ。文句あるか？」

「いいや…何か、いつもお前無視するか“「分かりません」”っていうだけだから…まさか、答えてくれるとは思わなくて」

「変に詮索されるのも注目されるのも嫌だからな。面倒なんだ」

本音を語る彼。

やはり、面倒くさがりなようだ。

「なぁ、お前、何で勉強も運動もできないくせに特進クラスにいるんだ？」

「誰が、勉強も運動も出来ないって言った？」

「え…」

予想外の質問返しの答えに驚く。そして、素直に言った。

「だって、お前、スポテスも期末も学年最下位の…」

「面倒なだけだ。騒がれるのも嫌いだ。それだったら、直接言わず影口言われ、身に来ない方がいい」

「は？つまり、何だ？お前は本気を出していないということか？」

「答えはそれしかないだろ。俺がこんなクソ学校の生徒に負けるわけが無い。俺に負けを背負わせるなど不可能だ」

「何、その自信」

「事実だからだ」

「な、なら、お前、今度の期末本気出せし…そのほうが、余っ程マシだって…」

「変に目立ちたくないんだ。これ以上な」

「へ？これ以上？」

「仕事というのは小説を書くこと。不知刃　詠理≪いさは　えり≫を知っているか？」

「そりゃあ、今話題の作家…」

「あれは俺のＰＮだ」

絶句。

まさか。

いや、現実を…

「まさか…」

「あれは、俺の名前をローマ字で変換して並べ替えたものだ」

「いやいやいや。あの大作家様が…まさかね…」

「現実だ。そして事実だ」

「それで、今やってるのがそれだと？」

「ああ。新作だ。タイトルを教えてやろうか？不死の狼狽え」

「それが、出版されたら本物だと？」

「そうだな。まだ俺の手元にあるし、出してねぇから出るのは二、三カ月あとだな」

「……そ、そうか…楽しみにしてみる」

あれ、何か…打ち解けてない？

とりあえず長いから一旦区切り。

また明日（今日）に〜！！

第二十六回

日付変わってから改ということで、とりあえず、ページだけ作っておくという！

最近、妙に寂しい。

特別何かがあるわけでもなく…

夏だからと言って、春みたいな出会い（王道）があるわけでもない。

うーん。

何か、物足りない。

そして、何かがつまらない。

ということで、
お盆は暇。

本日、気分転換に、珍しく
むっちゃ汚い自分の部屋を掃除してみた。
掃除している時どころか、歩いてるだけで…
否。
座ってるだけで汗が滝ってどうよ？

ってか、本当…
無駄に暑くなるよね。

しかも、色々あって…

今年は災厄年？

今のところ、３７度だとか、色々出てるけど…

４０度出してほしくないものだ。

ホント…暑いのは大嫌いだ！！！！！！！

２００文字書かなければ投稿が出来なかったりするこのパターン最悪。

あれからというもの、俺と旭は次第に話すようになった。
但し、放課後のみという短い時間だけだが。

互いのことを話すようになり、次第に会話の中での口数と表情が見え最近では感情を露にする姿をよく見る。

そんな旭を見ていて、いつも見ている無表情とは違った旭を見れて正直うれしいと思った。
俺に、色々話し、聞いたことに答えてくれるということは、ある程度心を開いてくれたということ。
少なからず、存在?を認めてくれたということになる。

「なぁ、旭っていつから小説書いてるんだ?」

「本を読み始めて…少しだから、小学校手前か？」

「げ、そんな年で読んでたのか。え、絵本とか？」

「いや、普通に小説。子供用の辞典があったし、家には絵本とか漫画とかいった類のものがなかったから、小説だけしか無いと思ってずっと読んでたらハマってた」

「相当なものだな…」

「まぁ、家にあるだけでも、軽く千単位だからな。市立図書館、県立とかも制覇してるし、秘蔵の本が埋まってそうな古本屋とかもよく巡った」

「すげぇ…え、因みに、古本屋とか市立図書館とかめぐり始めたのは…」

「図書館は小3か4。古本屋は5年生あたり」

「お前、本当に俺と同い年かよ」

「さぁな」

将来期待大どころか、今現在進行形で超期待、超売れっ子の作家「不知刃　詠理」が今目の前で、俺と話し、話しながら小説を書いているというこの状況。

まぁ、小説を読まない俺にとって、本自体に興味は無いが、小説を読まない俺でも「不知刃　詠理」の存在を知っていることが非常に珍しく、それだけすごいということを改めて認識した。

「今日はこんなもんか」

「もういいのか？」

「期限まではまだあるから。結構余裕」

「ふーん。因みに…一冊書くの期限ってどんなもん？」

「長編であれば、一ヶ月から二ヶ月。短篇とかだと二、三週間じゃないかな」

※専門的な事は不明なので、適当。

「結構早いな…だって、何だろ。ネタ考えるのとか、資料見るとかあるんだろ？それにお前学校に来てるし」

「うん。だから、授業とかで余計な頭使わないで今までに読んだ本とかを見返してるんだよ」

「ふーん」

つまり、あれか。

授業よりは仕事が重要で（当たり前）、いつも外を見てるの余計なものを目に入れないためで、頭の中はたとえ顔が無表情、無関心だとしても今までに読んだ本を思い返していると…。

分かり辛！

「お前、もっと表情だせよ。クラスのやつらからなんて呼ばれてるか知ってるか？」

「愚者だろ？まぁいいんだよ。それこそ、いじめとかの経験を受ける形でネタに出来る」

「恐ろしい奴だな」

「今更か」

「認めるな」

「本当のことだ」

「開き直るな」

何ていうか、コントみたいに、話が進むことに関心し、たとえまわりから言われたとしてもこいつといることが楽しいということを最優先しそうであった。

さて、ここで問題。

これはどっちだろうね？ＣＰ的に…

？×？

売れっ子小説家×クラスメート（平凡）

か

クラスメート（平凡）×売れっ子小説家…か。

鼎都的にはどっちも美味しい。

まぁ、気分次第よ★

第二十七回（前書き）

暑い…

クソ暑い…

第二十七回

お盆です。

至る所で

帰省ラッシュ。

そんなん関係ねぇどす。

だって…

帰らないもん。（実家広島）

暑いです。

でも

クーラーかければ

即死。

扇風機一個。

ちょっと危険？

寝れば…

グチャッ

「は！？」

汗の水たまり？（二次元フィルター要）

最近

暑すぎて、

二次元フィルター
どころか、

妄想

暴走

が出来ず…

思考回路

が

とまり

……

つ、つ…あ…り…ます。

乙★

その日。

旭は、無断欠席をした。

元々、親元を離れ、独り身で上京してきたあいつに学校に連絡を入れるような奴がいるはずもなく、学校に俺以外に話す相手がいないという状況でいるわけもなく、休んだ。

連絡が無いため、何とも言えない、今の状況。

先生が何らかの心配しても良さげだが、（今まで皆勤）社会はそこまで甘くないと、先生も放ったらかし。

俺は俺で、学校に来て、授業を受けているが心配でならない。
アナログなあいつ。
ＰＣ自体は貰い物で、仕事で小説を書くことに関し手書きでは色々と大変で、データを保存しなければならないため仕方なく使っているという。

そのため、あいつ自身、携帯電話などといったものを何も持ってないという。
あるのは与えられた最低限の家電。

そんなんで、大丈夫なのだろうかと思うが、あいつ自身苦労はして

ないらしい。

「家…行ってみるか」

一度、教えてもらった家へ出向こうと決意した。

「……」

あいつはマンションに一人住まいだと言った。
マンションだ。
そう。

マンションとはいっても、“普通”ではない。

「え、何、小説家ってそんなに儲かる物なのか？」

高級マンションである。

見上げれば、地上三十九階建て。
地下二階分の駐車スペース。

一部屋は必ず１２畳以上で、全ての部屋にＤ、Ｋ、Ｌがあり、更にＢＲから個室まで完備。
備品も望めばいろいろとサービスしてくれるという…。

「うわぁ…場違いな気がしてきた」

そして、あいつの家…は…。

「三十九階…」

つまり、最上階。

ピーンポーン

インターホンはまともである。
しかし…

この重構造なドアに、ドアの横に設けられた表札に目が眩む。

「はーい」

そして、聞こえてきた“女性”の声。

は、え？女性？あいつ…一人暮らしじゃ！？

第二十七回（後書き）

短篇？

うーん。

まぁいいや。

この展開は読めますかね？はい。

じゃあ、乙っすー

眠い…

クッソー

半日ぶっ倒れるとかどうよ！！

第二十八回（前書き）

やっぱいやばい。

第二十八回

まさか、

この年で

ポケットマネーをいただけるとは！！

絶縁…？

かと思われた

父方の

祖父母の家へ尋ねると…

まぁ、お盆なので

親戚がいたりするわけですよ。

叔父さん叔母さんから…もらえるわけですよ。チャリーン

ありがたきこと。

正直

常に金欠と言っている身なので…ありがたく昼飯代の足しに…ね？

さてはて。

まぁ色々

お盆は

振り返るわけですよ。

戦争とか

戦争とか

戦争とか

…

テロ？

地震？

紛争？

大変ですね。

玉音…流れるとは…すごいですよねぇ～

なーんて…

色々思ったりするのですが

平和っていいですね～

最近…は

平和過ぎて

危機感をもてないとか、大人がうんたらかんたら。（我は一生涯心のみ青年としていきる！）

はぁ…

ホント…

色々見れば

平和が一番いいと感じるものです。

なんて…

しみじみ…くっそー

俺は泣かないぞ！

泣かないんだー！！！！！ぐすん

おつつ。もー頭がいかれそう。

虐殺とか…聞いて…見て…る、とね？危ない人間になっちゃうよ？

今までのあらすじ。

クラスで「愚者」と言われている旭　零の正体は、超売れっ子有名作家の「不知刃　詠理」であった！

主人公（？）は放課後に仕事をしている零と偶々出会い、話すようになり仲良くなっていく！

そんなある日のこと！

いつも、無遅刻無欠席の皆勤賞確実！の零が学校を休んだ。

理由は分からず、もしかしたら！？という…のに、学校側は社会は甘くないようで、対処はしない。

そして、俺は決意！

「旭の家にいくぞ！」

一人暮らしのあいつは困っているはず。

そして、その助けにでもなれば！

ピーンポーン

「はーい」

え？

え？

女性！？

「？どちらさま？」

「え、っと…こちらは旭君のお宅で…よろしいのでしょうか？？？」

「ああ、零の友達？今ね、ちょっと手離せない…」

「誰が？ああ？このクソ鬼」

「何、生意気抜かしてんじゃガキ。さっさとしやがれ」

……？

え？

誰？

ってか…え、何かかなりキャラ変わってない？

えっと、おねぇさーん？

ってか、零は零で…変わってるし！！！

「ごめんねぇ。まさか零が他人に話してるとは思わなくて」

「いえいえ…こっちも…勝手にお邪魔しちゃって」

あれから、
旭が状況説明をし、仕事が終わるまで待っていることになった。

にしても…

「あいつ、余裕なんじゃ？学校休むほどなんですか？」

「締切り明後日なの。なのに、編集側に何も音沙汰なしで、メール

だけ“順調”だけ入れてるの」

「え…余裕ぶっこいて放課後普通にスローペースで話してるのに」

「あら、そんなに、懐いてるの？珍しいわね。あの子結構引きこもりっ子で、さすがに学校にいかないってのは健康に悪いし、社会にもねぇ。だから私がいかせてるの」

「そうだったんですか…でも、一人暮らしって聞いてて、綺麗なお姉さんが出てきたときは吃驚しましたよ」

「あら、綺麗って誰の事？」

「そりゃあ、もちろん」

「何やってんだ。バカ共」

「あら、終わったの？」

「ああ。持ってけ。そしてさっさと出ていけ」

「ひど～い。それが、編集担当に言う台詞？このデータ壊すわよ？」

「どうぞ。編集長にもう一個データ丸々送ってあるから問題無し」

「生意気…」

「うるせぇよ。いき遅れの年増が」

「このクソガキがぁあ」

…仲いいんか、悪いんか…分からないな…。

まぁ…

どうでも…

いいか…

ちょいちょい、時間の危機。

うーん

昼間書いておいて…

予約配信的な…あれでするかなぁ？

第二十九回

ラスクって美味しいね！

終戦記念日でしたね。

なくなられた方に…ご冥福をお祈りします。

今年は災厄の年か、地震にも見回れ、最近では日々恐怖。

とか、言ってる間にも黒いことをぐどぐど考えている人間です…はい。

ナノで、サイト作りしてから、ホント、こっちのこのネタ帳意外、手つかずです。

いつか更新を！

とか思いつつも、

暑さで

やられそうで…

いや、やられてます。

夏は…

死にます。

ってか

死んでます。

あれから、編集担当だという、風間絵美さんが帰ると安堵の息をついた零が目に入る。

「絵美さんのこと、好きじゃないのか？」

「まともに仕事をしてる分にはいいんだが、時に一人暴走するからな。面倒だし、鬱陶しいし」

「そうなんだ」

「そうなんだよ」

「ってか、俺に余裕って言ってて迷惑かけてるじゃん」

「俺には余裕なんだよ。どうせ、編集が目通したって直すところなんてないし」

「そんなもんなんか？」

「そんなもんなの」

「ふーん」

絵美さんに出してもらった茶菓子を食べて、紅茶を飲む。
騒ぎの間にぬるくなった紅茶は程よい加減で、深く味わって飲むことが出来た。

「んで、今日は何しにきたんだ？」
「ああ、零が休んだから気になって」
「ふ、ふーん」

返事をつまらせる零。
俺はその時はまったく気にもとめなかった。
ただ、友人としていることだけしか。

ちょいちょい。

ほんとちょいちょいの更新。

うーん

まぁええか。

ほな…また…別の奴更新できたらします。あい。

そろそろ偽りも完結せなあかんねぇ…

最後…

最後…

どないしようかね！（今更）

第三十回（前書き）

祝３０回目

第三十回

おー

何気に、頑張って

一月やってるというw

中々ないよw

俺、飽きっぽいから★

さてはて。

8月はもうすぐ…いや、まだ半分あるな。

そろそろ、小中高生が宿題とやらに追われているころ？

そうでもないか。

鼎都は、決まって

８月３１日

「うわー夏休み終わったよー明日始業式か…だる…」

００：００

９月１日

「あ、宿題やってね★」

こんなパターンですｗ

つまり

夏休み終わって

日付が変わってからやるというね！

まぁ当たり前だよ！

しかも、
中学後半の長期休みの宿題一個も出さなかったw
先生は、まぁ見放すというか諦めてるから何も言ってこないしね！
皆はこんな堕落した人間になっちゃだめだよ！
まぁ…
この小説を見ているのが…１５歳（高校生以上）であることを…祈りますけど…
うーん。
あ
やっべ
今日の誕生日の人に送ってないわwハピバメール（現在時刻２３：３３）

「やっべ。もう、こんな時間か」

「結構早いな。時間って。〆切くらいかと思ってた」

「お前、もっと他の奴とつるめよ。遊んでると結構充実して、楽し

いもんだぜ？あと、携帯買え！」

「ああ、携帯は…買うとあれ（絵美さん）がうるさいんだ。だから買わないと決めた」

「いや、不便だろ。俺も連絡とりたいしさ」

「…考えとく」

「うい。んじゃ、またな！明日は学校に来いよ！」

「…明日土曜日」

「あ」

「まぁいいけど。締切り明けは暇だからいつでもきていい」

「マジ？」

「うん。でも、新しいの始まるとムリだから」

「りょか！んなら、明日来るわ！んで、外出て遊ぼうぜ」

「分かった。またな」

明るく、まぶしいくらいの笑顔に俺は夕日に隠すようにうっすらと笑う。

元気過ぎて、少しマヌケでバカだけどそれくらいに陽気で朗らか。

あいつといると、全てが癒されると同時に何か不思議なくらいの気持ちがこみ上げる。

そして、それが初恋と気づいたのはつい最近。

友達で、同級生で、男同士。

叶うことなき初恋。

作家だから何度目にしたことか。

「初恋は実らない」

事実、今現在進行形でなりつつある。否、なっている。

彼は、俺を友人としか見ない。

見れない。

だから、俺はこの初恋を諦めるしかない。

告白した所で、引かれるがオチ。

折角、高校に入って初めて出来た友達。

否、今までの人生で初めての…。

だからこそ、彼に離れてほしくない。

彼と離れたくない。

いつも、冷たくあたるように、少しきつい言葉が出るが、彼は一行に気にしない。
それどころか、冷たい言葉も普通に受け入れるように、俺の一部とでも思うように普通に接してくれる。
俺が「不知刃　詠理」と分かってもそのままでいてくれた。

何でだろうな。

あいつが、話しかけてきたその瞬間に、何かが、駆け抜けたんだ。

俺は、本能的にあいつのことを好きになっていたのかもしれない。

会話…ｏｙｚ

短篇で、ネタで、流し分なので…気にしない方向でお願いします。

きゃは★

鼎都には珍しい純情な子。

かわいいね！

でもね、やっぱ黒い子も好きだね…

でも書けない今の現状がものっそい悔しい。

はぁ。

まぁいいね。

ほなまた明日〜♪

気分上々！

第三十一回（前書き）

また…キーボードがおかしくなったよ！

第三十一回

うぬぬぬ

大人の事情というやつは…ああ、情事じゃないですよ？

大変ですね～

お金が

お金が

ってw

あとは

人同士の信頼

信用

疑惑。

まったく。

いつも私を楽しませてくれる。

あ、黒い子のリハビリだよ？勿論！（きらーん

ちょっと、話を変えて、ネタ投稿。

黒のリハビリ★

「金」

「女」
「男」
「望」
「願」

ああ

人間は

何て　醜く　愚かな

“化け物”なのだろう。

悪魔？

そんなもの、可愛いとしかいえませんよ。

私は“人間”ですから。

欲望の塊。

全ての起源は“人間”ではありませんか？

ええ、勿論、あなたも人間ですね。

つまりは、

あなたも“化け物”の一人なのです。

人間は己れの欲望のままに動き、感情に支配され、本能で何かを感じる。

はは。

実に滑稽。

私は“化け物”であるからこそ、“化け物”をこの目で見てきたの

です。

人間ほど、私を楽しませてくれるものなどいませんよ。

人間を観察していれば、ある程度の言動、欲望が見えてくるものです。

はい。

実に

実に

面白可笑しく

まるで道化のピエロのように

人を笑わせます。

おどけた調子で

本性を見せない

頭のよく回転する

“化け物”がね。

人間というものは“嘘”、“真”、“裏切り”、“疑”が必ずあるものです。

時に“天然”なんていう者がいますが、所詮はただの人間。

ええ、私にも“疑う”など当たり前のことです。

実際“あなた”も私は疑っております。

だって、私がこんな話をしているってだけで、“私”と“貴方”の中になにかが生まれましたか？

“友情”

“信頼”

なんて、

ただ話してる中では馬鹿げたことですよね？

ただ、貴方がたまたま私と出会った。

ただ、私がたまたま貴方と出会った。

それだけの関係でありまったくの“赤の他人”なんですよ。

そう。

馬鹿げたことでしょう？

貴方はバカにするかもしれない。

ですが

他の人の意見はどうでしょうかね？

例えば

その偶然を偶然とし、必然ととっては矛盾を得る方もいらっしゃるかもしれません。

はたまた、どこぞのロマンチストならばこの出会いを“運命”という言葉に変えてしまうかもしれません。

貴方がバカにする人間はとてもとてもこ深い存在なのですよ。

だから、私は貴方を笑いました。

オカシナくらいにオカシスギルあなたを。

では、またどこかでお会いしましょう。

…あれ…黒い？

失敗★

第三十二回

あ…

つい

熱い

暑い…

このジメジメ…した

部屋…

どうにかならんものか！！！

主従っていいね★

ご主人様×ワンコ！！！かわゆす！

ネタ続き～

最近、ふと気がついてみれば零を見ていることが多くなった。

ふと

そう。

ふと気がつけば、目が意識なく、無意識で零をおっている。

なぜかと思えば

単純に思い立ったのは

自分が零のことが気になるから。

放課後に会い、話しをしたことをきっかけに、仲良くはなっている。

無論、周りとつるまない零にとってあまり騒がれたくないであろうことから周りに零と親しいことについて話をしたことはない。

まぁ、俺なりの気配りという奴だ。

それにしても、零は、見るたんびに無愛想な顔をしている。

まわりは、まるで旭　零という存在がないように全く気にせず過ご

しているし。

やっぱり、もっと周りの人と交流するのも一つだと思う。

今の世の中、ネットという便利なものが存在しているため、零の作品の評価などを見てみた。

小説を読まない俺にとってそれがどういうことなのかは分からないが、零の作品は決まって「主人公が無表情」、「無関心」、「冷静沈着」、「冷血」などという、主人公らしからぬものである。

大体が、ミステリーだったり、サスペンスだったりとジャンルが決まっているのだが、主人公が決まって感情が無かった。

普通、主人公ならば行動するにせよ、発言するにせよ、感情があり、喜怒哀楽を含めるようだが。

それに、中身はいくら深くても、主人公が薄っぺらすぎるというのが多い。

零は、中学も小学校もあまり友人を作らないまま過ごしてきたらしい。

昔から、本一筋の彼にしてはやっぱり難しいところなのだろう。

人と話をし、会話をする。人と目を合わせて話をするということが。

「だめだよなぁ…やっぱ」

零には悪いが、今度は…

と、悪だくみ風で考える俺だったとさ。

ごめんさい。

はい。

今日はここまで。

なぜか…

眠い。

超絶

そして

暑い…

暑い…

第三十三回（前書き）

眠すぎて…

暑すぎて…

覚悟をしておいてください…

おそらく

今月

来月

は

…

更新

無かも…

あ

第三十三回

翌日の土曜。

俺は、来るであろうあいつ、金城　優雅に備えて（？）色々と片付けていた。

今までの、原稿、下書き、ネタ、資料などを。

よくよく見れば、よくこんな中で生活していたなと思うほど俺の書斎は汚かった。

まぁ、殆ど、来客はリビングに呼んだだけだから、自室を片付けた所でどうもしないのだが。

その日の午後。

あいつは言っていたとおりに、来た。

だが…

「よぉ」

……

別に、嫌というわけではない。

そう。嫌ではない。

ただ、面倒なのだ。

「「「お邪魔します～」」」

グイッ

「へ？」

パタン

カシャン

「どういうこと？」

「いや、…えっと、お前もうちょっといろんな人と交流したほうがいいと思って…」

「そう。ふーん」

金城だけを引っ張り込んで事情を聞けばあっさりと簡単なことを。

ただ、面倒は面倒だ。

カチャン

「えっと、ごめん。中入って」

ぶっきらぼう
というか、
棒読み。

若干、金城の笑顔が引きつっていることは視界に入れなかったことにした。
俺は怒ってはいない。
ただ呆れているだけである。

「何がいい？飲み物」
「ああ、適当でいいよ」
「じゃあ、ブラックコーヒーでも」
「え゛」

これは些細な悪戯。
前に、甘党だと聞いており連中を連れてきたことに対しての仕返し。

「うわぁ、旭ん家でけぇな」

「これ、マンションかよ」

金城が連れてきた、おそらくクラスメートであろう人物三人はあっちこっちを見渡している。

「なぁ、旭の親って何してる人なんだ？」

家のスケールに疑問を抱いたか。

三人のうち一人が聞いてきた。

「外資系企業。でも詳しいことはしらない」

「ふーん」

「なぁ、これから皆で出かけないか？」

「お、それいいじゃん」

また、別の一人が提案する。

それにのったのは金城。

正直、外など出歩きたくないのだが…この際仕方のないことだろう。

「旭、行こうぜ」

俺は誘いに乗った。

今日は

割と…

涼しく…

過ごせた？

そして

肩がいたい。

ぎゃん！

ああ、今更ですが！

旭の相手の子は「金城（かなぎ）　優雅（ゆうが）」と言います！

ほんと今更ですけどね！

前に名前書いたかはあやふやだったんですけど、この際まぁいいっか★ってことで名前決めましたw

ほんと…やっとですね！

それでは、ここではまた明日～♪

第三十四回（前書き）

今日も曇り～

快適天気は最高だね★

奈良に行（逝）ってきます！！！（え

第三十四回

「なぁ、どこいく？」

「適当にその辺の店でよくね？」

「暑いからどっか喫茶店行こうぜ」

三人が、金城を中心に話す。

例はと言うと、一人放置ぎみ。

それでも、後ろをついてく零に少しは人慣れしたと思いたい。

「旭はどこいきたい？」

「どこでも」

金城はこちらの様子を伺って聞いてくる。

他の三人も興味を示し、見てくるが俺にとってはどうでもいい。

と言うか、もう帰っていいかな。

暑いし、人多いし、何かやけに見てくる奴いるしさ。

「んじゃあ、適当にお茶したあと映画とかゲーセンとか行くか」

「さんせー」

「うーん」

結局は、定番でお決まりだ。

「なぁ、旭って意外に喋るのな」

「あーそれ思った。いつも無愛想で、今も表情ねぇけど、返事は返すし」

「……別に喋れないってわけじゃない。ただ面倒」

「うわ！出たよ！超絶面倒っ子！」

「何だよ、その超絶面倒っ子って」

一人が言ったことに対し必ず、返す言葉。

友達関係はこんなことが当たり前なのだろうか。

人と人は、必ず何かでつながっている。

つながっているからこそ、一人で生きてはいけない。

では、人間を結ぶそれは何だろうか？

「やば…」

「どうした？」

「何か…うずうずしてきた」

「へ？」

「いや、何か、無性にネタが書きたい」

「いやいやいやいや。家まで我慢」

「……」

「その無言の圧力止めてくださいませんか…視線が…痛い！」

何だかんだいって、楽しんでる零であった。

……

奈良行ってきます。（二回目）

明日には帰ります。
探さないでください。

（笑）

では★

第三十五回（前書き）

ねみぃ！！！！！！！！！

第三十五回

雨　雨　雨

赤　と　黒　と　灰

異分子に

白

ぐほえ

色合い的にはこんな感じが好きです。

うん。

何かよくね？★

ということで、とりま

投稿！

あ、奈良行ってきましたw

国立博物館の壁に立体映像流す奴。見てきました〜

「ならファンタージア」…？だったかな〜…

たしかそんな感じです；

すっごいですねあれ！何か…クオリティ…ぐへー

当たって砕ければ、それだけ。

それからは、多分…あいつは俺を視界に入れようともしないだろう。

友人だった…否。

「友人」であるふりをしていた。

彼にはそう…植え付けてしまうから。

「んじゃ、またなー」

「おう！」

「ばいちゃー！」

日も暮れ始めれば、お別れ。

方向の違う3人はそれぞれの家へ向かって去っていった。

俺とこいつ、金城はというと、家は知らないけど、金城がついてくるため帰路を一緒に辿っていた。

まんま、俺の家へ向かっているのだが。

「なぁ、家帰らなくていいのか？」

「ああ、平気平気。どうせ、遅くなることは分かってるだろうし」

「ふーん」

「そんなことより、今から旭ん家寄っていい？」

「はぁ？俺、ネタ書きたいんですけど…」

「いいじゃん。邪魔しないし」

「……」

何て、押しきられれば断れるはずなく仕方なく家へと向かった。

少しでも、一緒にいられるのはいいが、少し痛い。

傷を抉られるようで…深く、痛い。

「はぁ…何か、どっと疲れた…」

「お前、まだ若いんだからもうちょっと子供っぽい…」

「無理」

「そんなこと言わないでさぁ…もっと遊び心とか」

「遊ぶ暇があればいいけどね。生憎俺は締切り明けの数日しか空いていない」

「勉強よりも、友達よりも、遊ぶことよりも小説が大切？」

「当たり前だ。そうしないと俺は…生活が出来ん」

「もうちょっと遊んでもいいと思うけどな…結構稼いでるんじゃないのか？」

「それは親の稼ぎもいいだけだし…関係ない」

「そか。でも少しは遊ぶってことを頭に入れた方がいいぞ？」

「うるさい」

バタンと閉まる扉。

俺はそのまま金城を置いて部屋にこもった。

無駄に響く、あいつの言葉。

そして、自分の情けなさ。

あいつが好きということも…

あいつが好きだからこそということも…

分かっている。

恋愛などしたことのない俺にとって、どういった気持ちかはまだ分からない。

ただ、今まで経験したことのないくらいにおかしくなりそうな頭。

そして心臓。

痛すぎて、痛すぎて。

そのうち、恋愛系の小説やら漫画には必須の「恋の病」だとか「恋患い」だとか言い出しそうで自分に恐怖する。

恥ずかしい意味も込めて。

多分、俺は、あいつに伝えられない分、どんどん蓄積していくこの思いを…あいつに冷めるまで背負いつづけていくんだろうな…と呆れる。

そうなるとしたら、はっきりすっぱり気持ちを伝えた方がなんて思ったりもするが、できるわけがない。

友人、友達…そして、男同士。

よく見かける「ＢＬ」も、あいつはそんなことでいえばノンケ。

普通のノーマル。

それが、虚しくて、悔しくて。

多分、今の俺には言い表しようの無い感情であふれているであろう。

遠い未来、否。

近い未来、友人という関係が崩壊しないことを…密かに…深く祈っている。

あ

終わっていい？

（笑）

こういうパターン

の

漫画

とか

小説

とか

ありますよね…

うわぁぁぁ

この人！！！

鬼畜！

ぜってぇえ鬼畜！！！！！

なーんて

毎回…

発狂（発叫）している鼎都でございます。

だって

悶えちゃうんだ！！！

だってだって

そんな中途で

終わられたら

…

泣いちゃうよ？

うー…

あとはあとは…

完結しないままサイトの閉鎖（実際自分がしてますけどね！！！）

あれは悲しすぎる…

でも…

その先の展開を

勝手に妄想するもよし！

脳内だけならＯＫ！

ってかんじで、かなり＋思考なんですけどね～

ほなまた明日★

第三十六回（前書き）

雷ゴロゴロ～！！！！

第三十六回

ちょ…もう…癒しがない。

華がない。

うん。

鼎都…萌不足で…脱萌症状起こしそう！！！！

「この世に…幸せなんていうものがあるの？」

――幸せは自分で掴むもの。

「この世界に夢はあるの？」

――自分で探し求め見つけるもの。

「この世界に何故生死が存在するの？」

――自然の掟。仕来り。循環。巡り。

「この世界に存在するものは意味のあるもの？」

――この世に存在するもの全てに意味は必ずある。

「ねぇ…運命って何？」

運命は、ときに残酷な夢を見せ、歯車を変える。

逆に回る歯車。

逆巻く刻。

刻まれる中に、何がある？

回る

廻る

巡る

ああ、

運命とは

何なのか…

「え？」

「だからさぁ、付き合ってくんね？俺と」

「…どこに？」

「……だから、俺と恋人にって…」

「正気？」

「冗談でもこんなこといわねぇっつうの。俺はお前に惚れた。だから…」

冗談でも、言わない。

ならば、本気だったらこんなことを言うの？

矛盾。

本気でも

言えない奴はいる。

常識を考えてみれば、当然。

「勇気あるね。俺に告白なんて」

「本気だからな。曖昧な気持ちでも言わね」

「俺男だよ？お前と同じものついてるよ？それでもいいのか？」

「いい。お前だからだし。お前がいいから」

「恥ずかしい奴。でも、いいよ」

「お前は好きでもない奴と付き合うのか…？」

「何それ、俺の方こそ言いたい。好きでもない奴と付き合うわけないじゃん？」

「…え」

「ずっと…うーん。多分入学式あたり？から好きだったよ。雅≪まさ≫」

「マジ？」

「冗談は言わない」

「はは：ははは！マジかよ…どんだけ…結構悩んだんだぞ…お前に振られたらって…」

「まぁかくしてたからね。常識じゃ通らない理屈だし」

笑う。

泣く。

喜ぶ。

怒る。

悲しむ。

俺たちの時は、そこで止まる。

刻まれていくはずの…道。

時間。

何故、歯車は狂う？

「お別れだね」

「雅≪みやび≫！！！！！！！」

チキッ…チキキキ…

「バイバイ…マサ？」

ズガァァァアアアアン！！！！！！！！！

暗闇の、静寂。
悲しみの漏洩。
あふれる涙。

悲しき、悲しき。
嘆き、嘆き。
虚しき、虚しき。

その手は空虚を掴む。

本当に掴みたかったものは…

もう…存在しない。

「うあああああぁぁぁ

彼らは何故、別れることに…

分断された運命。

結ばれるはずの二つの魂。

彼らの運命は残酷過ぎる。

空虚

空虚

空っぽ

空っぽ

虚しく

空しく

無

皆無

何も無い

無　　情　　無　　心

そこに存在するのは

虚
無

そして

狂

境

叫

恐

「ははははは…あははははははははは！！！

人は、ときに殺意を抱く。

しかし、その目的を達成したときの心はただの虚無感。

そう。

人を恨み、憎み、妬み…殺しても、何も残らない。

それは、ときに狂気へと変貌する。

そして……

何も見えなくなる。ただの化け物へ。

「殺す殺す殺す

「ねぇ、運命って何？」

それは、決して変えられぬもの。

「壊せないの？そんな運命なんて要らない。俺が変えたいな」

とりま…このへんで…

うーん。

ちなみに異世界トリップもの。

ほなまたの！！！

第三十七回（前書き）

…急にハイテンションになったとき…自分を抑制できません。

第三十七回

俺は大切なものを守りたい。

「大切なものって何？」

「お前がこの先生きてく中で絶対に守りたいもの…だな。父さんはそうだなぁ…母さんやお前だ」

「僕は大切？」

「当たり前だ！息子を嫌いになる父親など父ではない！人間の風上にも置けん！」

「僕も！父さん大好き！」

子供は無邪気故…唐突に…大人でも理解できぬことを、知れないものを、知れなかったものを聞いてくる。

その無垢、純粋さがとても危険。

そう、感じるのは親として失格だろう。

「人間は感情を手に入れて、言葉を話して何がしたい？」

「生きる。死ぬ。人生。繰り返し」

「人間に家族が存在し、忘れることのない家庭が何故あるの？」

「循環。共存。血筋。刻まれた真実」

「謎」

「否。矛盾。複雑。単純。明瞭。不明瞭。摩訶。不思議。支配。欲。様々」

「解明は…できるのかな」

「不可。人間。多数。幾億。不可能。絶対。存在。消失。不能」

「人間に、なってみたい」

「可能。神。可能。人生。繰り返し。人間。悦楽。共存。死。生。体験」

「行くか」

「承知」

二人のトリは飛び立つ。

人間を見ては、羨ましがり。

人間を見ては、楽しそうに笑い。

人間を見ては、憧れを抱き。

そうして、二人は、矛盾と複雑、単純に、明瞭と不明瞭な人間の中へと紛れ込んで行った。

これは単に、とりま、人外が人間に憧れて、人間として生まれ人間として成長し恋愛していくというもの…。

自分たちが知りたいということを共存することで知っていく…

ちなみに、元は…うーん。
神から授けられた形、鳥が人間の言葉と情に興味を抱く形です。
鳥から人間に…

神様は…ほっとけ★

ではまた会いましょう〜

第三十八回（前書き）

一日遅れ＋二日分ｉｎ広島

第三十八回

子供の子守…

疲れる…

よく

あれだ

「若さ吸い取ったれー！」

「うん」

……

わーわーきゃーきゃー

あっちいってほーい

こっちいってほーい

「うううぅ…」

…ムリ

というちょっちぐったり気味な鼎都です。

詩を

書いて…くれませんか？

歌を

歌って…くれませんか？

曲を

作って…くれませんか？

生を

教えて…くれませんか？

死を

教えて…くれませんか？

境を

教えて…くれませんか？

間を

教えて…くれませんか？

僕には聞きたいことが山ほどある。
知りたいことが山ほどある。
学びたいことが山ほどある。
教えてもらいたいことが山ほどある。

そうやって
僕は人に聞くけれど

人は「さぁ…自分で調べてみたら？」

なんて、簡単にいう。

でも、あなたは違ったね。

「うーん。俺に聞かれても難しいな…そうだなぁ…改めて聞かれると不思議だな。一緒に調べてみるか？」

ほかの誰一人として僕に“答え”を述べる者はいなかったのに。

僕の馬鹿げているらしい“質問”に向き合ってくれる者はいなかったのに。

唯一あなただけ…答えてくれたね。

「ありがとう。　優しいお兄さん」

…幽霊は通常に見えない…はず。

はず。

でも…普通に一般人に見えてます。

はい。

ということで、優しいお兄さん×幽霊の話。

え、一般人に幽霊が見えるかって？

別にいいじゃない…

よっしゃ、

今決めた。

この世界は…

幽霊が普通だぁぁぁぁぁぁあああああああああああ

あ！！！！！！

第三十九回（前書き）

二回目…

結構えらいぞ！（ぜぇ…ぜぇ…

第三十九回

幽霊ネタって……うーん

エロスでは多いが…

エロス？

うーん

霊姦・・・・みたいな？★

あんまり見ませんねぇ…

霊が主人公とかの漫画とか小説とかまぁそういった話系。

ということで、本日分の更新！

俺はあいつが大嫌いだ。

何故かって？

そりゃあ、毎日胡散臭そうな笑顔浮かべてるやつに、本性が全く見えぬやつに、疑惑を抱くのは当然だろう？

それが、本当に心の底からの笑顔と、笑いだったらいい。

ただ、あいつはいつもいつもいつも。

いつだって、何時何処でだって…あの笑顔だ。

変わることも歪むことも顰めることもしない。

ただ、真っ平らな顔面に“笑顔”を作ったような…人形と同じ笑顔を張り付けている。

皆は良い奴だとか成績、顔、運動などなどの人間面において完璧な人間だと言っている。

が、俺は絶対に思わない。

確かに、学習や運動、人付き合いなどは完璧に見える。

だが、見えるだけなのだ。

あいつは絶対”性格が悪い”。

『昼休み中失礼します。1-B　水無月　汪さん。1―B　水無月
汪さん。今すぐ生徒会室まで来てください。もう一度「-----』

最悪だ。

最悪なパターンなのだ。

「生徒会室」は、奴の巣窟だ。

↓

とりま次に続くということで！

軽く…うーん１８禁注意？

思ったけど

…

１５禁までだっけ？ここ★

まぁ練習ということで…はい。許してやって←

エロくないし…うん。

ということで、短くてすみません。子守は大変ということが分かったところで切りたいと思います。

乙……

第四十回

もそもそ…

と最近では、朝が冷え冷えとしているため布団から芋虫のようにずりずりと…

そしてのそのそと起き上がる次第にございまする。

さてさて、何ヶ月ぶりでしょうかね；

最低2ヶ月ってとこですかね～

いやぁ…

月日がたつのは早いです…

「歌ってよ」

「…」

「その哀歌を」

「やめて」

「悲しい、哀しい歌を…」

「やめて！！」

歌には人の心が

歌には人の思いが

歌には人の情が

限りなく深く
限りなく重く
限りなく広く

歌は人を魅了する

例え、人の好き嫌いがあろうと

誰かは好きになる。

だから、人は歌うのさ。

「哀歌」

それは哀しみの歌

「悲歌」

それは悲しみの歌

「喜歌」

それは喜びの歌

「楽歌」

それは楽しみの歌

謎だよ

君の歌は

謎だよ

君の声は

謎だよ

君の言葉は

「麻薬みたいだ」

その容姿とその声

そして、歌と歌詞。

全てが全て人並み外れた能力。

まるで、

人間を狂わせるかのような残酷な曲。

「君は化け物だろう。人を狂わせ、人を踊らせ、人を狂気へと落とす。君は人間なのか？」

私は歌いたい。

歌いたいだけ。

歌わせてください

声を

曲を

歌を

伝えたい。

「平和」

「安全」

「安心」

嗚呼

嗚呼

醜くも儚く

美しくも残酷な

この世界に

大いなる歌を

歌は人を魅了します。

歌は人を安らかにします。

歌は人を揺さぶります。

歌は必ずいつかは響く。

人の
こころへ
奥深く
安らぎを

ということで、歌を歌う少年と歌が聞きたい少年をとりま流したみたいな感じです。（笑）

まぁＢＬというよりは、友情より…ですかね～

最近は糧が無いんですよ。

うーん

栄養失調…でぶった・・・お…れる…ことはないですが…

何か知りませんけど

うちの家系、肺？とかの？気管が弱い？とかなんたらかんたらで…

過呼吸ぎみになるらしい。

え

って思いました

ってか、俺

普通に長距離担当だったんですが？

そういった医師の判断も無ければ短距離よりは長距離を好む人だった約◯年前。

今では運動など全くしませんのニート？

うーん。アリス可愛い…v

ということで、乙です。

いやあ…久しぶりに…書いた…ふー

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0070v/

メモ＆ネタ的な？普段の発散用

2011年10月26日00時10分発行